主幹◇麻生路郎

川柳雜誌

十月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和二年十月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌 第四卷第十號

川柳雜誌社發行

喜田川守貞著
原名守貞漫稿

（内容見本進呈）

聚類 近世風俗志

菊版千二百七十餘頁　天金總クロース
箱入特製　極美裝

定價金七圓五十錢
内地郵送料　二十四錢

一、本書は先年東京帝國圖書館に於て非常なる高價を以つて買ひ上げられたる書にして同館貴重書中の一たり。明治四十年一度發刊以來絶版となり以來多數の本書要求者に甚だ不自由を與へしものにして、今回こゝに一層の重版を希はれ再び發行の道へと進みこゝに再び全く改版整ひ、挿繪も昔のまゝ豐富に入れたり。

二、守貞漫稿と云ふ故喜田川季莊の筆になつて、其の載也たる所の編目は、先づ時勢地理、人事家宅、生業通貨に起し、男女の扮粧、服裝染織の變遷、華街嬌斜の風情、歌舞音曲、梳木傘履、四季の慣例、日用の雜具、童謡遊戯車駕等に至るまで、洽く當時の社會の狀態を寫し來つて、全版三十餘卷に及べり、殊に立化文政以後の情況を叙すること頗る詳細を極む。蓋しこれ著者深意の存する所こゝにあらむ。

發行所　東京市淺草區瓦町十番地　振替口座東京七二七九三番　電話淺草四七一七番　榎本書房

（出版目錄進呈）（郵券二錢送附の事）

「週刊朝日」懸賞

文藝大募集

川柳「松の内」

選者麻生路郎氏▽一人一句官製ハガキ使用の事▽大阪市北區中之島三丁目大阪朝日新聞社内週刊朝日懸賞文藝係宛▽入賞第一席(參拾圓)第二席(同貳拾圓)第三席(同拾圓)佳作數十名(薄謝)▽締切十一月五日限り▽發表週刊朝日新年特別號誌上

▼注意　川柳と俳句と期せずして同じ題で募集された事は興味が深いが、整理の際まぎらはしいので必ず川柳と朱書の事

松雨追悼句會

◇日時　十月六日午後六時三十分

◇場所　大阪市南區清水町停留所西入　端の坊

◇兼題　「一生」三句

◇會費　貳拾錢

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第四卷第十號目次

感想、評論

芥川龍之介氏と川柳　前田雀郎
朧げな柳珍堂の印象　岩本素人
道頓堀小品　庄萬よし
死ぬまでの川柳　奈良井仙坊
川柳と常識　酒井由女三

研究、其他

ビイドロとギヤマン　木村半文錢
花嫁か息子か　安川久流美
生業の古川柳(四)　岩崎柳路
東奥の佛都　蛭子省二
川柳の松江(三)　三井與之助
柳翁の靈を祭りて　麻生路郎
漫畫　累卵の遊び(六)　藤里藤園
古句質疑　紫路舟評
夢の黃金　蛭子省二
麻生馥乃

▲募集句

外科　前田雀郎選
ダイヒスト　大島濤明選
道具　東洋鬼・柳路選
柳珍堂　橋本二柳子記
川柳献句祭　藤里藤園記

各地柳壇・川柳書架　柴谷柴舟
競馬(表紙)題字　小出樹重
編輯室から　路郎生

創作

川柳塔　同高橋かほる
同喜田飯山
同西井ひろし
同本三笑
同安矢右大臣
同中澤蜀水
同横田眠聲
同酒井西駒杏
同安川合舟人
同北山悟郎
同本田柳一路
同庄萬よし路
同岩崎柳陽
同太田朝骨
同高見柳水
同津田耕乃
同麻生馥
同橋本二柳子
同青砥不二綱
同中野柳陽
同長崎柳秀

粒々集

近作柳樽　諸(?)

近作柳樽

路郎選

妻揚子別れし女などのこと　盤ケ池
金屏風今度出す日を考へて　同　其象
レッテルに母上等とのみ思ひ　同　同
ひよろ〳〵として一錢を拾ふのみ　同　同
人間をつゝましくする袷なり　同　同
醉漢へ女給臆する色もなく　同　同
母さんになれば斷髪どうする氣　同　同
考へてゐると茄子を賣りに來る　大阪　山雨樓
甘い素振り男に見せて兒を育て　同　同
日本にゐる叔父さんを慕ふ由　同　同
一尺の尺のものうくほつこかれ　同　同
浴衣の糊よ肩がはしるよ　同　同
八景は寫眞で知つておくこころ　同　同
仕樣ない親で孝行が盡せます　豐中　石竹
產みました私の方をわすれられ　同　同
戻つたは金がほしさでなからうな　同　同
口笛がやみから牛こ戻つて來　同　同
こうもりの悲しさ鼠に似て居ます　同　同

北濱の横で帽子を洗つてる　同　同
燈臺の影で仇の知れた文　大阪　毒仙
晝火事の見舞茶菓子で笑ひ合ひ　同　同
生ビールお髭の泡も拭きあへず　同　同

献句雜感

刈りたてのズラリと並ぶ献句祭　同　同

芦花翁逝く

幕切れをシンミリさせて芦翁逝き　同　同
反動のこはさを知らぬ哀れさは　同　靜雲
ペンを持つとこにも生きた影がない　同　同
身丈けは六尺あまり飯を食ふ　同　同
見渡せば山に突當る日本　同　同
退窟なことはないかい樹よ草よ　同　同
この次に生れるならば他の星　福岡　無限
氣にくはぬ事を彼等は皆信じ　同　同
麾下に集るは＝ハトリばかりなり　同　同
酒樽のまゝは飲めると思はれず　同　同
私淑した跡を最後の文字に見せ　同　同
女が乘るとまだ輕いボートだが　同　同
頰骨が暑さの中に高くなり　螢ケ池　彥春
生あれば惱む心の消えざらむ　同　同
此頃は心配讓る人もなし　同　同
難波橋異國のやうな風も吹き　同　同

風鈴屋子供の顔が皆映り　同
人知れず見るトラックの寫眞記事　大阪　白蝶
爭へと云はんばかりに貯めて死に　同
口紅の赤さあざむき切つてゐる　同
親切を金に積つて厭がられ　同
嬲しさは風にも聞いて見たうなり　同
暮れかゝる空は故郷と同じ空　廣島　露斗
敷島へマッチをすつてからのうそ　同
其の中に明日ころされてしまふぶた　同
くれかゝる空へいぞんはなかりける　同
鉛筆はついでのやうになめられる　同
今度來る嫁の氣性へ母が惚れ　螢ヶ池　昭郎
湯上りの腹のしわ見る病み上り　同
看病につかれた母を淋しく見　同
看護婦の通つた後のねぐるしさ　同
夏痩へ二男一女の脊が伸びる　大阪　凡平
内風呂の棚に娘のものばかり　同
くたびれた足に不便な家と知る　同
ほんやりと立つと女の長い影　同
戯れる犬へくらしの顔を向け　同　鮎美
派出所へ吾が妻君を寄せつけず　同
口入屋男の方をまたせとき　同
店先きで僅かな事に子を泣かせ　同

左官にはちと坊ちやんが邪魔になり　同　源坊
新築は借家の日向せまうする　同　同
捨てられた兒に貰ひ人が殺倒し　同　同
弟に負けて將棋の駒を投げ　同　同
鳥籠を逃げたが小鳥餌にこまり　同　赤城
遲く歸れば蒲團の上に寢て居らず　同　同
天神祭儲けにやならぬ永店　同　同
十一二その頃父も生きてたし　同　同
體面を張つて海水浴へ行き　同　さゝ舟
商賣の可愛さこゝは負けて置き　同　同
弟ゞ話すは國の事ばかり　同　同
置いてゞもあるやうに冬の龜がゐる　盤ヶ池　刀四郎
衝立を廻つて鬼が叱られる　同　同
聊かの誇り英文タイピスト　同　同
紙ばかり切つて見せてる肥後守　大阪　新水
押賣の汗ゞなりけり支那呉服　同　同
二人の足元海に續く砂　同　聞路
枕元妻の雜誌を持つて來る　同　同
前裁も電氣のカバーの色になり　同　同
鈴らんが咲く國からの手紙着く　北海道　三郎
神棚にいつしか塵の積りたる　同　同
幾らかの餘裕が道を踏み外し　同　同

病み上り朝顔だけに盡す役　松江　清宵
よその子を泣かしいゝ氣の子が戻り　同　同
何事も貧乏がさせた罪でした　同　同
告白の女に主任室しまり　東京　鳴穂堂
濱言葉もう濱の子とよく馴染み　同　同
孤兒院は書寢の家を諦める　同　同
無理やりに理窟つけてる氣の强さ　石川　金鐵子
大降りの空痛快な氣で眺め　同　同
神聖を口癖にした業に飽き　同　同
要するに金で買はれて生きてゐる　松江　穂波
謹愼へ盆栽の趣味が生れたり　同　同
東西屋止つたとこは空家なり　同　同
轡虫何ンでお前は仰山な　神戸　笑人
日盛を雀は砂にまみれてる　同　同
母ちやんの解いた宿題違つてた　同　同
墜道を出てこんなとこにも案山子　石川　茶撫郎
蠣船の灯に草臥れた脛を撫で　同　同
ともかくも喰つ付いてれば捐がない　同　同
職工にチト試さるゝ學校出　松江　町二
地は暗く天は凍てたり追ン出され　同　同
死は遂に難し潮音寒くなり　同　同
保險があるとは父のこと母のこと　神戸　鎌月
菜ッ葉服丈けに引止めかねてゐる　同　同

押され押されて大まかなことばかり　同　郎
刑事室今のは頬を撲つたらし　京都　京
可愛い手に花火線香が危ぶなくて　同　同
ペン先で食つて居ますと撫然たり　同　同
同情はするさ手元に金はない　神戸　水
女房は涙もろさにつけ込まれ　同　火
酒が出てから落つきが變つて來　同　同
組長に一人反感持つて居る　同　同
幸福の家に今年も孫が殖ね　大阪　白
女の兒可愛いゝすねを出してゐる　同　帆
除隊兵後何日目〳〵　神戸　郊
大臣も紙上で何のねうちなし　同　村
プラタナスの陰で待つてる永いこと　同　同
思ひ出したやうに簞笥の鍵をかけ　大阪　楓
たださびしさびし女の自筆なり　同　篠
町内へこんご來ましたあんまなり　同　椿
ソーダ水女のまつけ長いこと　同　薫
泣かせずに寢かしてほしい旅戻り　京都　光
振つたのか振られたのかと喫茶店　同　風
今浴びた肩へ手拭掛けて居る　同　同
母の手拭甘つたるい匂ひがし　大阪　翠
梯子から首の白さを見せて降り　同　岸
怨む眼に土塀が長く連りて　螢ヶ池　一
　同　閑
　同　同
　山口　白
　同　鷗

夫婦きり西瓜のたまる事三つ　大阪　大夢子
蟬捕つた一人りへみんなついて行き　阪同
惠まれてゐるとは知らぬ若き身の　神戸　二南
膝の子の夢は無慈悲に扱はれ　同同
流行歌ひけて嬉しいヴァヰオリン　兵庫　桃哉
新店の風呂屋床屋のむつまじさ　同同
ぢりあふお金を前に無駄ばなし　大阪　青石
強い手で數へる錢の尊けれ　同同
招かれて猫をほめねばならぬ家　大阪　醉夢
日曜を子供の相撲見ては飲み　同同
柄にない事だと友は一蹴し　神戸　志郎
許されて出たが昔の婆婆でなし　同同
讀經の出來るこの頃一週忌　大阪　彩秋
虫干を背中で擦つて通り抜け　同同
焦燥の手に細書を持ち替へる　河内　與志夫
呑み込みの良いばつかりがするでなし　同同
それはかうですと女教師向き直り　同　香雅子
出稼の息子眼鏡で歸へつて來　同同
金遣で親に似て母氣に病めり　大阪　萩麿
馬鹿らしさ千圓の帶買ふ人よ　同同
後押しに母の足もとチト搦み　同　伴内
椽先の母こくめいに爪を切り　同同
憎らしい嘘を扇で遮つて　魚崎　亂耿

君子ともあらうが金に捲き込まれ　同　大阪　燕柳
兄弟が同じ詰め手に負けて來る　同　同
隣ゝの不和アンテナにはつきり出　同　松江　天痴人
はじめての人ゝ思へず話し込む　同　同
田草取りこれだけ残り蚊に喰れ　大阪　炭車
自轉車は盗んで行けのやうに立て　同　同
賢人も將棋を指すゝ哀れなり　同　別府　童翁
打水の庭を二三歩あるいて見　同　同
貴郎の顔にかゝはるからゝ着替て居　大阪　よし江
向ひの子に好かれ折々困るなり　同　同
遠足に歴史は儼ゝ残つてる　同　青司郎
戀だらう看護を受けた其日より　同　同
聞かないで下さい一人もだえまず　同　同
買はぬ氣が値札もソツト裏返し　同　幸泉
禿げてきた事から國の話しまで　同　夢中
俄雨かん〳〵帽を懐へ　同　山海
郎君の出世立つたり坐つたり　安東縣　花蝶
納豆賣美談の内へ數へられ　石川　富久雄
休暇兵友に話すも堅うなり　神戸　默童
夏休み家を手傳ふ年になり　横濱　夢人
驛前のホテル大きく構へて居　靜岡　黑髪
期待する程に息子はなつて居ず　堺　太路
奇蹟もなく藥石も効がなく　長野　高峯
俄雨ハンモックだけ残つてる　螢ヶ池　玉政

芥川龍之助氏と川柳

―私をして語らしめよ―

前田雀郎

『唯僕に對する社會的條件。……僕の上に影を投げた封建時代のことだけは故意にその中にも書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたかと云へば、我々人間は今日でも多少は封建時代の影の中にゐるからである』。

これは芥川龍之介氏の遺書『或舊友へ送る手記』の一節である。が、私はこの短い文章の中に、何か芥川氏らしい――東京人としての芥川氏らしいある姿を感じない譯にはいかない。

その日――七月二十四日は、きのふまでの酷暑にひきかへ、夜來の雨は、思はず床の毛布を引き寄せた程、朝を涼しいものにしてゐた。昨夜は兩國の川開きで、その趣味講演に愛宕山の放送室に起たれた飴ン坊氏を、向嶋の例の家に迎へて遲くまで痛飲した爲め、今朝は何となくものうく、折からの日曜を幸ひに、シト〳〵と庭木に降りそゝぐ雨の音を枕に聞きながら、午近くまで眠りをむさぼつてゐたのであつたが、思へばこの時既に一代の文星芥川龍之介氏は、永久に覺めぬ眠りの床に、安らかにその身を横たへてゐたのである。

一日なす事もなく、書齋の整理なごして夕方になつて仕舞つた私は、徒然のまゝにこの夜小石川の某所に開かれた『新星會』の句會に、久しぶりで出席した。席上私は句をつくつたかごうだか忘れて仕舞つたが、句會の後の甘い疲勞にからまれた体を快い夜風にまかせながら、宮尾・太郎丸、三太郎など歸途を同じくする連中と一つ電車の人となつた。私が芥川氏の死をはじめて聞いたのは、實にこの車中に於いてゞあつた。

私も三太郎も、いづれ劣らぬ芥川氏の愛讀者だつたので、車中に落つくといつか二人は、近刊の『改造』に載つた『西方の人』を話題にのぼしてゐた。

『君はあれを讀んでどう思つた。何か可怪しなところがありやしなかつたか』

『どうも自分ばかりドン〳〵先へ歩いて行つて仕舞つてゐて、ガッチリ四つに組んでゐるところが尠いやうだが……』

私はそんなことを三太郎に話かけてゐた。と、『芥川』といふ名が耳に入つた爲めか、今まで太郎丸と何か語つてゐた宮尾が、突然私の方を振りかへつて

『芥川は自殺しましたよ』

と云つた。私は自分の耳を疑つた。が、それも須臾の間、私はいつか笑ひ出した。

『冗談いふな』

『いや、本當ですよ、今朝。さつきラヂオのニュースにありましたもの』

私は宮尾の眞顏を見遁さなかつた。私の胸は轟いた。然し私はまだその事實を信じやうとはしなかつた。――そんな一大事が起らうとはどうしても信じられなかつたからである。

私は芥川氏が常に催眠藥を用ひてゐるといふ話を聞いてゐたので、その量でも過ごして、人事不省になつた、そんなことの間違ひだらうと思つてゐた。三太郎も私と同じやうな解釋だつた。

『けれども、芥川ならやりかねませんぜ、今の文壇で直自殺といふことの連想出來るのはあの人だけですよ』

さう云つて私を驚かしたのは太郎丸だつた。私は惡いことを云つて呉れたなと思つた。今まで心の隅にそつと仕舞つて置いたものを、グッと摑み出されたやうな氣がした。私はもう平靜では居られなかつた。

その事實を信じまいとつとめてゐた私も、今では宮尾の報告のあまり簡單なのが寧ろ焦つたくなつて來た。私はもつと詳しく、もつと確實に、その眞相が知りたかつた。

私は早く家へ歸つて今夜のラヂオの話が聞きたかつた。私は家の女關を上るなり、母に、今夜のラヂオのニュースが、確かに芥川氏の死を報じたかどうかを訊ねて見た。

『あ、毒藥を嚥んだのだつて、奥さんと、菊池寛といふ人へ書き置きがあつたさうだよ』

社會の一出來事として、芥川氏の死を報ずる母の答は、あまりにもハッキリとしすぎてゐた。遺書！、私はもう口がきけなかつた。

『どうして死んだのだらう』

私は口の中で繰返して見た。だがどうしてもまだ心から信じ

る氣にはなれなかつた。自分の眼、自分の耳で、しつかりその眞相を確かめぬ以上は疑ひなしにそれを肯定することは出來なかつた。おそらくは事實だらうと思ふ心の底に、何か一縷の望みを殘したまゝ、私は寒々とした氣持の中に、とも角もあすの朝の新聞を待つことにした。

意地惡く新聞は遲かつた。出社時間のキリ〳〵まで待つたがまだ新聞は配達されなかつた。私は妙な焦燥を感じながらいつもの電車の人となつた。と、私の眼の前には大きな芥川龍之助氏の寫眞があつた。氏の死を報ずる大きな活字があつた。或る舊友へ送る手記といふ氏の遺書があつた。あゝ芥川氏の死はつひに事實だつたのである。私は『貼りたての障子に穴をあけられたやうな』何とも云へない寂しさに襲はれた。

事實はつひにごうしやうもない事實である。私は社の机の前で、芥川氏の死――何にもつかまへどころのないその『死』といふボヤツとしたものを、しばらくボンヤリ見つめてゐた。そして私は、何といふ理由なしに『しやうがないな』と、自分自身につぶやいたのであつた。

私は、私と芥川氏との、それはホンの往來で摺れ違つた位にしか過ぎない、淺い短い、然し一生その喜びは忘れないであらうところの交渉について、しづかに振りかへつて見た。

私が芥川氏を知つたのは、――といふよりも、私が芥川氏に知られたのは、極めて最近のことである。何かの用事で芥川氏を訪問した私の友人が、話のついでに、氏の作品の熱心な愛讀者の一人に私があるといふやうなことを、氏に語つたらしい。これがそも〳〵の最初である。氏はこんなことをも大變に喜んで呉れたやうで、その友達へのある用件の手紙の端へ、僕のものを讀んでゐてくれるといふのは前田といふ方ですか、そんなら川柳をやる方でせう、僕は前田といふ人の川柳をいつも見てゐます、といふやうなことを書き添へて來たのを見せられた。大正十四年、恰も『川柳みやこ』全盛時代の夏のことである。

川柳みやこは創刊號から芥川氏始め文壇詩壇のある人々へ毎號拜呈してゐた。どうせ讀んでは呉れまいけれど、これも何かの運動の一つになるだらうと思つて續けてゐたのであつたが私はこの芥川氏の手紙を見て、その好意に感激した。私は氏の好意に對しその時感謝の手紙を出したかどうだが、今は忘れて仕舞つたが、それに前後して氏から、私と川村花菱氏との『武玉川』の句解についての論爭に對する好意ある言葉及び拙句

佛の姑口あいて寢る

に對する思ひがけない讃辭を頂いた。

『武玉川』に就いてのそれは、私の花菱氏に對する駁論の態度を褒め、併せて例の問題になつた

安弔ひの蓮の明ほの

の私の句解に贊意を表されたもので、當時四面楚歌、柳壇こぞつて私の說に反對し、いさゝか自分の旗色の惡い時であつたから、私にとつてこの芥川氏の味方は百萬の援軍とも思はれ、私は本當に涙をこぼして喜び狂じた。正直な話、その時の私の心は、たゞひ柳壇こぞつて私の敵となるとも、私は恐れない。私はこの一人に知つて貰つただけで滿足である。私はこの一人の理解者が得たいばかりに戰つてゐるのだ、とさへ思つた程である。（私は今までこの事をわざと活字にしなかつた。私はそんなことから私のケチな心を芥川氏に見透されたくはなかつたからであるが、當時私が如何にこの事に密かに感激してゐたかは、おそらく今日でも雨吉が記憶してゐて呉れるだらう。安弔ひの句については、私の名こそ出さね、芥川氏自身がその事を『改造』六月號の『文藝富な、餘りに文藝的な』の一項『川柳』の中に書かれてゐる）

それから間もなく『川柳みやこ』第十二篇の卷頭に掲げた氏の『輕井澤にて』の句

きぬぎぬや耳の根ばかりあでやかに
死ねとも思ふ秋風の末

の二句を、輕井澤の避暑先から寄せられたのであつた。

當時私達はこの句を見て、たゞ氏の才に敬服するばかりであつたが、今となつてしみ〴〵この句を讀み返し味はつてみるとこゝにもまた今日の黑いものが、何か薄墨色に匂つてゐるやうにも思はれる。殊に私の句

佛の姑口あいて寢る

に共鳴をおくられた氏の心持には、作者として徒らに唯、ニヤ〳〵と顎を撫でてはゐられないものがあるやうな氣がする。

私如き後輩が、芥川氏の『死』を擇ばれた胸裡を推察することは遠慮せねばならぬ。いや、知らうとしても私如き凡下の徒には迚もうかがひ知ることを得ないだらう。然し聞けば氏は家庭的にも不幸な方であつたさうである。家といふ重い棟の下に、辛くも今日まで『生きるために生きて』來た氏が、夜更けて靜かに階下なる寢室に降り、何にも知らずに幸福さうに、鼾の音も安らかに眠られてゐる御養父母や伯母君の、その枕邊に立たれた折々、どんな感慨で寢顏を見られた事か。この句の作者である私は、今更ながら私の句に、私の作意以上に恐ろしいものが藏されてゐるのを知つて、いや、おしへられて、慄然としたのである。

氏の私に寄せられた『きぬぎぬや』の句も、かうして考へて行くと、唯氏が『小生もちよつとまねをして見たくなつた』といふやうな、そんな思ひつきからつくられたものではないやうにも思はれる。甚だ不遜ではあるが、私は試みに私の『佛の姑』の句に、氏の二句を附けて、變形的な『三つものをつくつて見

た。

佛の姑口あいて寢る
きぬぎぬや耳の根ばかりあでやかに
死ねとも思ふ秋風の末

この私の僭越を許されたい。然しこれを通じて讀んで、何かをそこに感じないだらうか。私はこの句に寢起きの美人の嬌態の圖を配した輕はづみを思ひ出して、腋下に汗を覺えてゐる。さぞかし氏は當時『知らざる者の愚』を憐れんで、苦笑されたことであつたらう。

該博なる氏の識見と理解は　そしてまた都會人としての趣味性は、決して『川柳』なる文藝にも無關心ではなかつた。『文藝春秋』の氏の追悼號に掲げられた日夏耿之介氏の思ひ出を讀むと、度々古川柳に就いて語り合つてゐられたやうでもあるし前掲『改造』所載　『文藝的な、餘りに文藝的な』を見ると、私共の新川柳運動にも理解を持たれ、殊に今日川柳が置かれてゐる詩歌としての地位には、有難い程の（當り前の事であるが旨千人）現在の詩歌壇の人達に較べて）同情を寄せられてゐたやうである。氏に機會があつたなら、或ひはもつと川柳をつくられてゐたかも知れない。現にいつぞやの『文藝春秋』に發表された、何といふ題であつたか、今手許にその雜誌が無いので思ひ出せないが、輕井澤の印象を叙した散文詩體の短章其他は、立派に川柳であつた。

私はこれほど氏から好意を寄せられながら、不幸お目にかゝる機會を得なかつた。お言葉に甘へてお邪魔に上らうと思ひは思つてゐながらも、お仕事の性質からウツカリ御迷惑をかけてはとそれを慎れたり、また私といふ人間が、始めての方をお訪ねするといふことに、どうも氣おくれのするタチなので、その中に何かの機會を見つけて、そんな當てにもならぬものを當てにしてゐた爲め、たうとうその謦咳に接することを得なかつた。

私の書齋に、氏の書を額に欲しいと思つたので『榴花洞』と書いて頂き度いと失禮だが御願ひしたところ、僕でよかつたらいつでも書いてやるから來い。とまで云はれてゐたのに本當に殘念なことをした。今は悔んでも追ひつかない。

氏に最後に御手紙をあけたのはこの六月である。『改造』六月號に載つた氏の『川柳』の原稿を『昭和川柳』の第二號に轉載させて戴き度いと思つたので、お願ひをしたのであつたが、あれは自分としてもまだ考へが充分でないから、專門雜誌への轉載は、今しばらく待つて欲しいといふ叮嚀なお斷りの御返事で、これは成就しなかつた。

この事は後で聞いたことであるが、あの『改造』の氏の川柳觀に就いては當時九段老人を始め大分川柳家からいろ〳〵な手紙が行つたらしく、氏も黙からず迷惑されたとのことである。

そんな爲め遠慮しての私への斷りであつたのだらうが、川柳家は、少し川柳の門外にある名ある人が川柳に關して何か云々すると、直ぐ何だ素人の癖にと何所かにケチを見つけて、寄つてたかつて叩き潰す氣になるが――ありやうはその人を踏臺にして、何か自分の爲めにしやうとするのだらう――まことに情ないことである。少し位間違つたところがあつたにしても、そんなことは何でもないではないか、それよりもさういふ人が川柳といふものに關心した、それだけで既に大きな收穫ではないか違ふ違はないは、それから後の話である。判つて來れば自分で自分の間違ひを訂正する。今の川柳家だとて生れた時から川柳家ではあるまいし、川柳家もいつまでこんな根性でゐては、川柳もなか〳〵世に出まい。出ないのが當り前である。鳥なき里の蝙蝠の思ひ上りにも困つたものだと、私はその話を聞いてしみ〴〵慨嘆した。

私はその原稿の御覽ひをする時、併せて、近頃は大さう御氣分がよろしいやうだから、來月はお邪魔に上り度いと書き添へた。全くその頃の氏は、矢次早に大作を發表され、外見には素晴らしく元氣に見ねたので、私も思ひ切つて御目にかゝりに上らうと思つたのだつた。そして早く涼しくなる日の來るのを樂しみに待つたのであつたが、つひにその日は私の上に惠まれなかつた。

私は七月二十七日。酷暑の谷中齋場に於て、我が尊敬する芥川龍之介氏の靈前に、最初のそして最後の『さよなら』を恭しく捧げたのであつた。

その夜私は、亡き人を偲んで私の手帳の中に次の二句を認めた。

この夏を死にそこねたる歌枕
眼の色の人には見ねで面白し

然し、私の胸の障子にあいた穴はどうしやうもない。

瓊音氏の事　七月二十七日に、柳樽評釋の著者沼波瓊音氏が、西片町十番地で永眠されたので「國語と國文學」の十月特別號で追悼錄を掲げてゐる。令弟沼波守氏の追憶の一節に「兄は明治十年十月一日名古屋の玉屋町一丁目で、町醫沼波桃仲の孫、同鉞之助の第一子として產れました。西南戰爭が終つたばかりの時でしたから、武夫と名づけたと父が申してゐました。兄自から瓊音を號したのは、玉屋町に產れたからです。稀れに用ひた瓊々庵や、天野眞名井の名は日本書紀の「瓊響瓊々天の眞名井にふりすすぎ」からきてゐます」と。

其告別式に久良岐氏が弔句をささげてゐられる

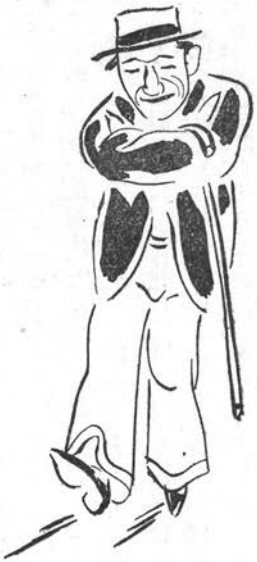
瓊音の點にならない句をささげ

川柳漫畫 累卵の遊び（六）

路郎評
紫舟畫

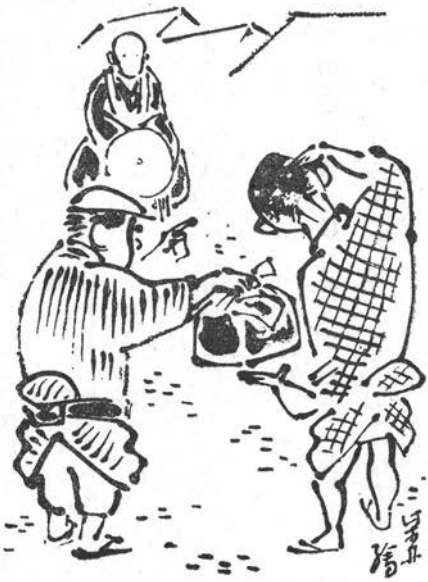
嬉れしさの三丁程も續きけり　馬行

青春は接吻なり。抱擁なり。カルピス也。魂の跳躍のすべて也。若き男ありけり。ひとり歩めど微笑なかなかに盡きず、狂せるにはあらざる也。彼の女を空氣中に感ずるが故なり。嬉しさの極みならずや。愛は強くステッキは輕し。



坊主持さりとは知らずやって來る　塊佛

坊主持、坊主の知ったことにはあらず、知ったことにあらざる坊主、その遊戯の運命を左右す。これを延長し來る時、そこに人生をまざ〳〵と見せらるゝ也。勞せずして巨萬巨億の富の主となる人あり、勞してなほ飽屑の如く扱はるゝ人間あり。惧るべく悲しむべきは運命の惡戯か。



いもぼうを出て圓山をだらう下り

箱

春は花いざ見にごんせ東山……で京の春は人生の春を象徴す、老も若きも嬉々として足の踏むところを知らざる也。二箇連。

の圓滿さおして知るべきのみ。平野家のいもぼう天下に鳴る。

記者の眼に危險な會社斗りなり

萬よし

あゝ榮花一朝の夢、一朝の夢。天下の豪商高田も茂木も脆かしこさ泡沫會社こ何等選むこころ無かりき。指もて押せばバラ〳〵こ崩るゝ土塀の如き感なきあたはず。我が筆一度その虚を衝かんか。忽ちにして將棋仆しこならん。大銀行にしてなほつ然りこ記者の意氣軒昂たり。

寫眞說明……向つて右は伊藤觀魚氏、中央は、故松村柳珍堂（鬼史）左は藤原游二郎氏（游魚）大正五年ごろ撮影のものならんか。故人遺墨も同じ頃の作で共に游二郎氏の秘藏するところ。因に三氏共「雪」時代の同人なり（路）

朧げな柳珍堂の印象

岩本素人

去年の柳珍堂忌が濟んで間もなく、私は旅に出た。旅から歸つて來ると又柳珍堂忌だ。こんな事は、去年の九月に旅に出て歸つて來たら、又今年の九月だ。と言ふのと同じで、何の變哲もない樣ではあるが、實を言ふと、私が句會と言ふものに臍の緒を切つて始めて顏を出したのが、此の柳珍堂忌なんだ。その時迄はうかつな話だが、松村鬼史が柳珍堂と言ふ川柳家であつた事をさへ私は知らなかつたのである。その後一二回他の句會へも出たが、今年の柳珍堂忌にも幸大阪に居合せたので、出席する事が出來た。私の僅々四五回の句會經驗の內二回迄が柳珍堂忌であるのも、何か因緣のある樣にも思はれる。之れに靈的もつたいを付けて、故人の靈が私を川柳へ導いて呉れたと言ふ事にして置く。誠にいたづらな靈である。さうして見ると、生前二三度會ふには會つたが、ろくに話らしい話しも仕合はなかつた俳人鬼史よりも、靈魂柳珍堂の方が、私には何だか緣が深い樣に思はれる。此緣をしてより深からしめん爲に、生前ろくゝ話し合もしなかつた故人の印象を、無理矢理に、私のあ

たまの皿をへがして、捜して見る事にする。と、腦味噌の乾きかけてゐる隅の方から、ぼろ〳〵の書付けが一枚出て來た。繼ぎ合して讀んで見ると、墨か淡くてよくわからないが、こんな事が書いてある。墨水、月斗、鬼史、草迷宮、九浦、恒富、大更、耕雪、溪仙、一成等と比叡へ登人る。とある。幸此中に故が入つてゐる。故人は錚々たる俳人であつたから斯うした連中の中に入つてゐるのに不思議はないが、畫家でもなし勿論俳人でもない私がごつした譯か此中に混つてゐたのである。

序だから申します。私を畫家だと思つてゐてくださる方々に斷つて置きたい。私は畫家ではありません。無法にも私は、畫家に成りたいなぞ、思つた事もありますが私には畫の天分が恵まれてゐない事を、淋しくも自覺させられて、以來私は、畫家たる事を斷念しました。畫に限らず、天才なきものが徒に職業的藝術家たらんとする事は罪惡であると、私は信ずるものであります。三十才にして何等天才的閃きなきものは凡手である。去つて車を曳くの經濟的たるに如かず。とは中井宗太郎氏の叫ぶ所……なんて、馬鹿に理屈つぽくなりさうだから、本へ戻つて比叡山に登る事とする。

俳人と畫家　この比叡登山に私か混つて居たのは、病的放浪癖の私が、此時も五六年の流浪生活から歸つた時の頃で、時ははつきりと覺へないが、九浦氏が大阪へ來てゐるから、文展第一回より後ではあるが恒富氏が新報の挿畫を書いてゐてまだ彼の有名な『日照雨』を出さなかつた前だから、文展第二年か三年の頃かと思ふ。夏であつた。夕刻大阪を出て、先斗町の菊水で飯を食つてゐると、伏見から巨人溪仙畫伯が、自然木の七八尺もあらうと言ふ杖を提げてやつて來た。俳人の鬼史、草迷宮、の兩氏は溪仙氏とは俳友の間柄であつたらしい。此時皆の服裝が今少し先生らしかつたら、菊水でも金屏風の一双位を持ち出して、寄せ書きの一つも願ひ出たかも知れないが、何を言ふにも大家連の風體と言つたら書生丸出しと言ふ所だ。それもあまりたちのよくない方だ。恒富

氏なごは折り目の分らない單物に黑木綿の兵子帶經木眞田の帽子に尻には手拭をぶら下げてゐる。溪仙氏は仁王に組飛白を着せたと言ふ形で大きな山桐の書生下駄を履いた上に例の自然木の杖と來てゐるのだから、氣の弱い京女は癪を起しさうだ。こんな風だから御揮毫雛は逃れたが、若い藝術家達は何か樂書がしたいと言ふ顏付だ。溪仙氏が誰かのすげ笠へ『鳥入山、溪』と六朝で書くと。脇の方へ『鬼史』と故人が署名する、と言つた調子。皆で樂書をやつたが、笠の一つや二つでは物足らない。恒富氏の經木シャツボも雛を免れなかつたのは言ふ迄もない。さつかうする中十二時を過ぎたので、菊水を出て墨水氏を除く外、一同は三條から吉田へ出て、白川口から比叡へ登つた。道は眞暗なので姿こそは見へないが馬鹿口や駄洒落は前や後から續けさまに聞へて來る。始めの中は皆元氣だつたが暫くすると大分閉古たれかけて來た連中があるらしい。月斗氏なんかも此中間であつたらしく記憶したものだ。大更氏が例の調子で『發句屋はんちうもんは口ばつかり達者で足のてんとあかんもんやな』なんて嘖嘩を吹きかける。發句屋はんと言はれる事は俳人殊に月斗氏は大のきらいであつた。其中で默つてコツコツと歩いてゐるのが、溪仙氏と鬼史氏であ。殊に溪仙氏はいつも一行より一丁計り先に歩いてゐた。鏡の樣な琵琶湖が一目に見へる七曲り邊で夜が明け始めたので喜ぶ事喜ぶ事、皆の元氣が回復した。それから二時間程行く、と遙か脇道の方から一丁の駕が登つて來る不思議な事には其駕には武家らしい人が乘つてゐる。中からちらちらと丁髷と朱鞘が見へる。近寄るのを見ると、なんのこつちや墨水氏が丁髷のボテ髮おもちやの朱鞘を一本落し込んで澄まして駕に搖られてゐるではないか。故墨水氏のあの太短い布袋さんの樣なからだにこゝ〳〵した丸い顏の上へ丁髷のボテ髮を載せて脇差しを差し、山駕に乘つた所を想像して見玉へ、トテモ笑はずにはゐられない。其時の姿は今尙私の眼に殘つてゐる。皆が腹を抱へたのも無理はない。流石に口の惡い岡本大更蕎伯も、アッと言つた切二の句が次げなかつた。程なく根本中堂へ着いて宿院で精進の午飯を御馳走になり、足の達者なものは四明へ登り、口の達者なものは寢ころんで駄洒落る事になつた。溪仙、鬼史、一成なごは前者で、月斗大更、恒富なごは後者であつた樣に覺へる。又葉書へ落書を始めた。皆は句だとか讃だとかを書いたが、鬼史氏は只名前斗りを書いて、句も何も書かなかつた樣に記憶する。五時頃から阪本の方へ下る事になつて、唐崎迄歩いた。唐崎ではもうづつぷりと暮てゐた。そこで大津迄船を雇つた。丁度宵月で湖の上は素的だつた。伏見一泊の記は略して思ひ出の紀行はこれでおしまいにするつもりだが、之れでは柳珍堂の印象が甚だ不鮮明だ。此時は私もあまり物數を言はなかつた上に故人が非常に無口な人であつたせいもあるのではないかと、故人に罪を被せて逃げて置く。　昭和二、九、八

生業の古川柳（四）

岩崎柳路
蛭子省二

自分が行脚中に纏めたものは、六十五項で終る筈であつた處が、讀者の一部より、他誌に既掲のものゝ有無に係らず、出來る丈け全部を掲載して呉れると申込みがあつた。これは當然の事ではある。川柳雜誌は本誌としての絶對權威を有すべきで、即ち本誌の記事が完全であれば他には又からない事になる。只自分は此の種の研究をするには不適任者で、古句研究は遂に七分迄が風俗資料としてゞあつて、詩としては餘りに貧弱であるを思はしめられる。柳樽は川柳家の寶典ではあるけれ共、初篇にだつて狂句も撰まれてゐる、駄句駄吟も隨分澤山ある。本稿を御覽になつても、愚な句を列べねばならぬ事は項目を別つに於て止むを得ない業である。然し讀者の御希望に添ふ爲め、終りの一回分の返稿を願つて、項を追加し句で御判談を乞ひ、説明は省略して完結を告げ、更に興味ある作に就て一句一吟の檢討を續稿として試み度いと思ふ。

（四十二）炭　賣

古よりある賈歟季寄の書にも、炭賣翁を載しばいたんわうと訓ぜり。今世三都とも貧民小戸の俵炭を買得さゞ者　一升二升と炭を量り賣るのみ。是をはかり炭と云、俵炭は店にて賣之のみ。

鶴裘をきて賣りあるく計り炭
炭賣のうしろ姿は炭の折

（四十三）針　賣

針賣男子或は老姥も賣之。又小間物賈も兼賣之。繍衣の針を賣る。京師御簾屋某は針名工とす。故に江戸にても詞に、みすやはりはよろし云々。

針賣が死んで一日見世をひき
針賣のさび聲うらへ通りかね
針賣にひだりの袖を見せ立ち
針賣に左の袖を内儀みせ
針賣を呑んでうはゞみ狂ひ死
針賣をかへし亭主は叱られる

（四十四）眼　鏡　賣

新物を賣り或は新古を交易し又は破損を補ふ。尚は鏡磨こて平日も來れども、寒中を專らとす。

呼聲の細く長くは眼鏡賣

（四十五）紙屑買（附　紙屑拾

反故及び古帳紙屑を買ひ又兼し古衣服古鋼鐵古器物をも兼買ふ。京坂の詞てんかみくずてんてんと云。てんてんは古手の略語、古手は古着こも云。古衣服を云也紙屑古鋼鐵の類は秤にかけて買ふ也。京坂の圖の如き丸形の籠上に麻布風呂敷を置く。江戸は丸形方形二種あり、方形を御膳籠と云　仕立料理其他には專ら用之ここと多し。

二歩出たは紙屑買の親の代
女房の無筆をもらう紙屑屋
杖ほどの箸でくつてる屑拾ひ
咽の疵平癒すると屑拾ひ

（四十六）古　着　買

古着買米揚笊こしめし籠

（四十七）錠前直し

損錠・失鑰等の修補を云也。敢て今俗に修補をなほすと云也。是は京畿は躋ひ東武は肩上に携ふ。

堯舜の代には錠前直し來ず

（四十八）肴賣

鮮魚のみうるあり、或は枯魚を兼し賣るあり、京都と江戸の魚賣如此。大阪にも如此らあれども、專ら鮮魚のみを賣る者は大阪住の者に非ずして泉州堺より來る者と擬の尼ケ崎より出る者也。江戸の魚賣は四月初松魚賣を盛也とす。

膓を入れかへにす・る肴賣

肴賣とんびを切つて人だかり

肴賣四ツ過まじはえらを見せ

肴賣うつやるえらを見せ歩き

肴賣念頃ぶりはわたをぬき

天竺の禮儀を守る肴賣

（四十九）海鼠賣

大阪にては生海鼠を白晝に賣ず、申刻以後のみ賣之。又大阪にては金海鼠を賣ることなし。及び之食こと嚴禁なり。是唐闌の來舶は長崎の官市也。彼値物には昆布を第一とし金海鼠をも用之。昔年彼土に遣るに金海鼠多からず故に禁食之、一時の假令永制となりて今に至り嚴禁たり、白晝生海鼠を賣廻らざるも此故也。京江戸は白日も賣之、又金海鼠の禁なし。

海鼠海鼠と呼ぶ頃のせしなさ

五雜俎云。海參遼東の海濱に之れ有り、一名海男子、其狀男子の勢ひの如く、其性溫補、人參に敵するに足る、故に海參と曰ふ。

海鼠は藥を忌み、之れでしばれば泥の如くとけてしまふ。

藥店で呼べば逃げてく海鼠賣

（五十）鮪賣

鮪は卽ち目黑、死すれば眼より血を出す大なるものを王鮪と云ふ、月會云、季春天子薦鮪於寢廟、故有王鮪之稱。一丈餘のものより六七尺に及ぶ。二尺以下を目鮑と云ふ。

ごつちでもおとりなさいと鮪賣

びなしかしうせたと鮪買はぐり

鮪賣おろずと犬がよつてくる

鮪賣根津へてな〳〵擔きこみ

鹽鮪取卷ひてゐるかゝアたち

尾かしらをつけて鮪を二ツ井かひ

（五十一）むきみ賣

むきみは蛤、あさり、ばか、さるぼゝ等の介殼を去りたるを云。江戸深川に此介を漁する者甚多し。介殼を未去■■から蛤かりあさり等唱す。からある蛤或はからのまゝあさり等云ふべき中略歟

むきみ賣丈夫な升をつかひつけ

むきみ賣仰山にして一つまけ

むきみ賣くるに歸らぬ内のばか

むきみ賣やがて買ふ程苧にふかり

むきみ賣ゆふべけいどの咄をし

中裏と夜具ごすれ合ふむきみ賣

（五十二）あさり賣

あさり賣實のないやうにふれてくる

九篇上は下五が『呼むでくる』となつて、居る。

からあさり値段の出來た音

淺蜊の膓の中から出る眞珠を尾張眞珠と稱して、伊勢眞珠と區別して卑しむで居る。

（五十三）蛤　賣

蛤　價京坂貴く江戸賤し小蛤大略一升價錢二十文許、京坂は五六十文或は百文。蓋し京阪蛤にむきみ無之。

蛤は其形が栗に似て居り、海濱に在るから濱栗と云ふ。

桑名の娘ばつかりと明けてうり

桑名蛤は其名天下に冠たるもの、泉州堺は小にして美味。阿波は殼厚く扁大にして四五寸のもの有り。

（五十四）鮒　賣

鮒、鯽。冬は肉多く美味。胃を調へ膓を實するの功ありと云ふ。

鮒賣に紙を一束してやられ

江州の湖中に產するもの大きさ一尺餘。源五郎鮒と稱し賞せらる。

柳行李鮒くふ内にしてやられ

辨慶を取卷いてゐる源五郎

名の高いのは鮒五郎鯉太郎

（五十五）ひしこ賣

ひしこいわしと云ふ。東京にてはシコとも云ふ。小魚にして鰯に似て別種なりと美味なれど賤民の食とす。鹽三合鯷一升石にて壓するもよく、又は生薑番椒等を漬ける佳。

やつたら升をせつゝく　鯷賣

ひしこ賣伏見町から河岸へ

（五十六）干鰈　賣

鰈には種類が多い。星鰈、石鰈、瓶子鰈白水鰈、日板鰈、木葉鰈等々。

干鰈賣仕舞つたは馬形な形

（五十七）鰻　賣

鰻は腹淡黃なり。胸黃の義。馥燒にして食ふ。

治傳尸病兒捐勞。殺其虫也。妊娠食之。令胎有疾。

壁土をあかるなようと　鰻賣

鰻賣女房をなぶり〳〵賣り

向ふがはないで鰻が賣れるなり

豆州三島明神前の小川に幾千萬の鰻が住む。明神の使魚なりと。

夢の黃金

麻生　霞乃

なるべく金は大きいままで持つてゐたいのは人間の普遍性であるが、さかく紙幣の方からくづれたがる。

五圓紙幣早く銀貨になりたがる　久流美

五圓紙幣今夜で二日持ちこたへ　馬行

カフエーにレストランに安價な耽溺を求むる徒も、五圓紙幣の開散を惜しむ心かくの如く切なるものである。

ここに、人界の思ひを捨つる詩人がある。彼は月に嘯き、雲の心を悟り、鳥を友として、利慾にまどはざること秋の空を見るやうであるが、或る夜、たまく〳〵金貨の夢を見た。　拾へども〳〵、かしこにも、ここにも、金貨がうづ高く散亂してゐる美觀に接した。悲しむべきかな、彼の心にも物慾はひそんでゐたのであつた。

落葉は夢の黃金を思ひ出し　柴舟

此詩人現實にさめて、再び黃金を忘る。病葉の聲の何んと心よき事よ。

川柳塔

○　高橋かほる

河内家が好きで堪らぬ古本屋
甘酒屋曲つた事が嫌ひなり
小料理屋小芋をゆでて客を待ち
お月さん二つ書いてゞ五つの子
挨拶の後で人妻子をあやし
靜物の鯖に淋しい秋となる

○　喜田飯山

家出した理由はかりは頷かれ
似合ふかときくは似合うてゐるつもり
利子だけも費ひきれない老夫婦
健在ゞ見えて著書なゞ出してゐる
園はれはまたも宿替かゞおもひ
嬢さんも下女も發育盛りなり

○　西本三笑

アブサンよ今夜脱稿さしてくれ
今朝も又枕凹んで夜が明ける
夫婦喧嘩たがひに負けぬ氣でやすみ
時刻ゞはなんだ人間あはれなり
靜脈が額に見えし處女なりし

○　安井ひろし

よその子に編んで着せてるワイフにて
飯つぶ踏んで出ると停電
教會の話コーロギ鳴いてゐる

洗禮の相談ゥム〳〵きくばかり
里の母おんなじ事を書いて來る

○　中澤濁水

白髪染手もつけられぬ姿なり
看板屋生地だけ出來たのは重ね
足音が來て車夫が見え幌が過ぎ
あした葺くらしい瓦が配置され
本當に蓄まるこ金を不自由がり
後添は電氣を一つ減せこ言ふ
置いて出る出入を午睡見て眠り
金魚屋はこれ買へがしに水を替へ

○　横田眠聲

大阪はすげないこここ損をして
口紅があかしダンサー逢ひに行き
ぬれ衣に日もとつぷりこ暮れはてて
持つた事のない金高に其夜寢ず
灯の消えたやうにこのごろ友は來ず

○　矢田右大臣

孝行の終ひ近づくハハキトク
せめてもの事に信ずる氣を起せ
昆布食べて人なつかしく尼二人
一萬圓位なか〳〵儲からず
古本屋圖本こ云ふ敵が出來
金庫開く音に掛取心よし

○　岩崎柳路

うかれたり沈んだりして十八九
良心の麻痺せる俺こ妻の顔
衝立の外にも誰か居るらしい
恐ろしい氣で裏書に判を捺し
利子だけを女房に持たせ詫にやり

○　太田朝陽

生死を一時にして　（二句）

元氣よく泣いても母は抱くのなり
母親は祝弔の答へ口に出ず
納棺に丸髷の先少しゆれ
曇天に雷獨樂の音淋し
良緣にたんす一さを殖てゆき

○　高見柳骨

生娘になりすます程の戀をする
執行官今日の暑さを知つてゐる
現役こ同じ歩調で歩かされ

○　津田耕水

他所の子を抱けば我子が淋しがり

○　安西杏三

偶像が無ければ生きて行けぬのか
乾からびてプロだ〳〵と意張つてゐる
名刀の匂ひ思はす秋の空
洋裝の面會が來て皆默り
コスモスの葉が憂鬱になれと云ふ
侮つた事を忘れて賴みに來
怪談に自分の影が大き過ぎ
電燈の明るさ妻も何か縫ひ

○　酒井駒人

菓子一ッ殘して大工みんな立ち
爭議團容れられずんばの意氣強し
交換手腹違ひの姉ひとり持ち
來るなれば二人で來いと電話口

○　川合舟々

ひとりして立てたと見ゐぬ程背負ひ
御寮さんとるにたりない事を訊き
しみじみと語るに惜しき京の月
ひと走りもう襷をば外してゐ

○　北山悟郎

町内の顔を揃へて三笠山
大蒲團の重みもうれし秋となる
海水着きても女給とうなづかれ
ダンサーを止めたのか來ぬ養育費
海岸にコックとボーイの聲がする

○　本田柳一路

乘り合にすればよかつた伸夫の汗

○　庄萬よし

仕合せは曾て夫を疑はす
琵琶湖でも死ねずと家出からの文
叩いたろかなぞと棟梁悅に入り

○　麻生葭乃

かこちつゝなけきつゝ喫ふ卷煙草
寂しさを旅に捨てんと思ふのみ
こほろぎよ今年は一人たらぬ蚊張
曼珠沙華子の命日に毒々し
歩と角と飛車と桂馬の子をば持ち

○　橋本二柳子

子を連れた乞食子のこと云うてゐる
先生もあたたかい方へ來て眺め
ままごとに父の病氣も知らぬやう
死んだ子を抱くよに他所の子を抱き
妹がうしろに居るとは知らなんだ
齒車が眞白くなつて動く也

粒々集

○　松江　青砥不二網

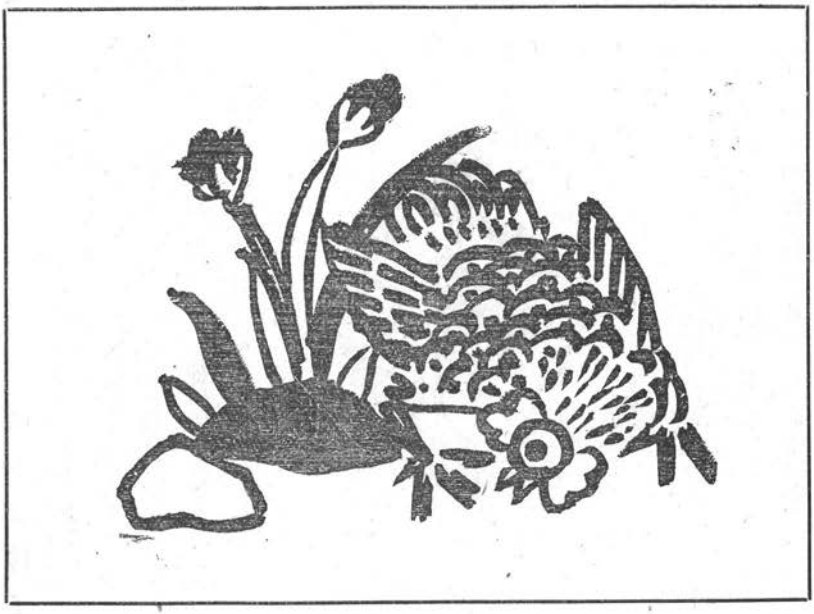
嫁ぐ日の爲に教はる事ばかり
藤椅子の外に女房はしやがんでる
いつそもう我から前科者となり
三度目のお茶も飲まれて嬉しさう
呉服屋とぐるになつてる樣な妻

○　大連　中野　柳楊

飛び散つた玉に丸みを見失ひ
今日強くなる日双手を開け放し

○　御影　長崎　柳秀

欺す氣とほれてる氣とが差し向ひ
山畑へだてて見るとは景になり
糸通す母つめきりと年をとり
許嫁ティプを離す氣になれず
いつにない虫の居所が氣に觸り
看護婦をからかふ程に病癒ゑ
指を輪にまるめて訊けばうなづきぬ
眼藥が日向を向けば涙ぐみ
病み上り座れる膳を嬉しがり



ビイドロとギヤマン（中）

―附フラスコと丸山―

木村半文錢

江戸では寛保、延享頃には漸く子供のおもちやに過ぎない小徳利類が製造れたらしい。降つて寶暦にはビイドロ製造人として有名な萬右衛門があり紫色のビイドロを吹き出して從來の白、黄、萌黄なぎを壓迫したさうだ。最も、當時のビイドロ製品は今日で見る硝子板のやうな厚みはなく、ごく薄い、從つて非實用的のものであつたに相違ない。この冒頭の（1）や（2）の句は安永の頃の作だから、寶暦以後は少し吹き方にも進歩の跡があつたものだらう。（1）も（2）も句意は恐らく雛祭の主客應答のシーンであらうと想像する。然し、いくら高價なビイド

ロであつても『わるさまごわせる』といふ傾白は、當時の江戸ッ子の氣質とも受けられない。（3）の句は明かに簪にまで用途が普及したわけだが、この句も雛祭か祭禮當時の娘の風俗を叙したものであらう。（4）は金魚鉢であるのは直ぐ肯けるがこの句の生んだ前年明和度に、千賀道有といふ茶坊主らしい男の邸宅の模様を書いた五月雨草紙に『夏月納凉の座敷は天井へガラスを張り其中に金魚を蓄へたり』と書いてある處をみれば天井のガラス張りなどが好き者の手に思ひつかれたものであるらしい。金魚鉢の天井などは一寸江戸人の考へつきさうな企てではある。一事が萬事、何にか變つた趣向を漁つてゐた當時の江戸ッ子としては――。

（5）は碎はれ易い硝子細工を土産物にする人物の心理描寫である。そして前の四句よりはやゝ價値的に一歩を進めてゐる（6）は（2）の句と等しく雛の座の嫁のもてなし振りであらう（7）も同じくみりんを飲む下戸容だが（9）の場合は少しく意味が相違する。この（9）は恐らく硝子を逆さにしたやうな――といふ例の美女の形容に用ひた言葉と等しい意味があらうと思ふ。この硝子を逆さ逆さにしたといふ言葉は上方から江戸へ移されたものであつて、美人を形容比喩したものだ、（江戸で後にふらそこを逆にしたといふ轉化があつたやうに記憶する）この言葉は明治初年にも上方に殘つてゐて、確か十二三年頃に發行された川柳集に（硝子を逆さにしたよい娘？といふやうな句を見たことがある。そして此句の意味は硝子を逆にしたやうな美人を巧に口說き落した、所謂、いゝ男を詠つたもので バレ句に近い。（10）の句は硝子とわれものとを含んだ上に、（9）の如く硝子を逆ましたやうな美人でないにしても、母親は自分の娘を案じてゐるといふ意だ。（8）の句は硝子を飾つた雛壇の叙景か但しは藥鑵は老翁の頭を意味するのか、私には解らない。硝子の句は未だ探せばあらうが、もう其の必要もなさそうなので此儘にした）

何れにしてもビイドロの製品は、明和、安永頃に可なり旺に流行したに相違ない。同時に價格も餘程一般的に緩和されて來たものであらう。文化度の式亭雜記に依ると『江戸の水の硝子壜は米澤町の硝子屋が、傳馬町の平井善右衛門の店より安くて百文に十六』だと明記してゐる。最も斯うした質の薄い製品は安價であつただらうが、天井に張れる程度の硝子板や障子に箝められた硝子板などは製造することは能きなかつたのだから、無論舶來品を仰がねばならぬ以上、それ相應の高價を拂はせた

ものであらう事は想像されやう。

それに硝子を應用した眼鏡類が可なり多種類輸入せられてゐたらしい。西川正氏の長崎夜話草の長崎土産物には『鼻眼鏡・遠眼鏡、虫眼鏡、數眼鏡、磯眼鏡、透間眼鏡、近視眼鏡』等を列擧して濱田彌兵衛が壯年の頃に蠻國で製法を習ひ傳へこれを生島藤七に教へたのが吾國の製法の元祖であると述しゐる。そして硝子は蠻人長崎にて教へて造り初めしより今其傳流絶ねず』と同書に見へてゐるが、恐らくは例の非實用的な部分のものを指すので、眼鏡類に應用した精巧なものは濱田彌兵衛が傳を繼承したのであらうとも思ふ。江戸で有名な遠眼鏡製造人淺岡泉蝶の死んだのが明和三年度であるから、可なり古くに遠眼鏡が江戸で製造されたのであらう。柳樽初篇の『こそぐつて早くうけさる遠眼鏡』の時代には、既に見料を取つて一般民衆に觀覽せしめたことは略推察される。これは既に日本人の手で製造された物を提供してゐたのであらう事は想像するに難くはない。然し、近視眼鏡や虫眼鏡の專門的なものは何うであつたか、私には不明である。

例の覗き機關などは相當古い時代に見世物として應用せられたことは世間周知のことに屬してゐやう。殊に、ギヤマン彫こいつて硝子に彫刻が加へられたのも此の時代で豫想外の流行を遂げたものだ。然し、それらの傾向も寛政度の儉約政治に一頓座をつかせられたのは當然だ。文政頃の流行唄に『御殿女中とギヤマン船は、褒めや見れども乘られまい』といふ、いかにも當時の氣分を現はした俗歌があるが、多少江戸の世紀末的な光景が斯うした流行唄の中にも芽してゐるやうだ。

斯うして南蠻（主に葡萄牙人や西班牙人を指す）以後、紅毛（主に和蘭人やエゲレス人を指す）の流行となつたが（島原亂以後である事は勿論）古川柳にも

丸合羽おらんだの名はふるときる　（安永）
紅毛の家鴨爪先ねらふなり　（文化）
下女が文紅毛文字で口說也　（同）
三段半はおらんだの離緣狀　（文政）
紅毛の字をよだれにて手はかき　（同）
石町の鐘は紅毛まで聞こへ　（同）

の如き狂句體が見當る。かと思ふと、より以上の狂態ではあるが時世を嘲罵した（今の醫者和漢蘭でもろ匙加減）の如き猛烈なのも散見する。儒者の唐びいき、醫者の和蘭びいき時代にあつて當時の民衆の眼も皮肉に光つてゐたのは當然だ。況して銳眼なる川柳子に於ておや――こゝ云ひたいのだが、この狂句など

では甚だ心細い――。

當時長崎が新文化の中心となつて殷賑を極めた事は想像されやう。長崎夜話草に、

『いにしへは大村、久島城主の領なりしを豐臣關白の御時、公領と改まりて長崎、山里、淵村の三庄、合せて三千四百餘石にて、民口五萬の喉をうるほすに乏しといへども華夷の船の商ひ物二十萬金のぞめきなれば家は四千餘り、竈は一萬に及びて魚菜、鳥獸、唐土の菓菜、蠻夷の珍菓、口に饒かに唐人の管絃耳を富し、珠玉錦繡目をよろこばしむ』

と如何にもエキゾチックな極樂淨土を讃美してゐるが筆者の兩川正休が長崎住人であつたゞけに多少の鄕土的プライドの誇張もあらうが、見て來た樣な嘘を吐く程度よりは眞實相に近いと見做してよい筈だ。その長崎の繁昌を脊負つて起つた丸山の一廓は想像以上の賑しさであつたであらう。長崎の丸山でなくして、天下の丸山であつたのは當然だ。

丸山の客は一萬三千里　（天明）
丸山の別れ一萬三千里　（文政）

は、明瞭に遊女と紅毛人の關係を物語つてゐやう。新井白石の西洋紀聞には

『またヲランド人に問ふに、ヲランド地方より此に來るには、その北海より去りて西し、アフリカの西を經てカラブ地方に至つて東に折れ、アジア南海を過ぎてジャガタラに至り、こゝよりまた北して、スタアタラ、ボルネ等の諸島を過ぎて、東北の方、我國に至る、其行程ははるかに凡ソ一萬二千九百里に及ぶといふ』

と詳細に航程を舉げて質問してゐる。この一萬二千九百里が俗に一萬三千里と約言して了つたらしい根拠である。長崎夜話草には『紅毛國は唐土天竺より西北の方にあたりて海上一萬餘里の國とあり、環海異聞には長崎よりの書上と間氏考定する所とは大いに差へり、書上にてはエンダランドより日本迄一萬三千里となる』とあり、和蘭より英蘭の方が一萬三千里に適してゐるやうだ。然し、一般人には紅毛と云へばオランダもエゲレスも一緒に見做してゐたのだから、其點は問題でないやうだ。が蘭說辨惑には『日本よりは海程八千六百里餘』となり、大分に距離があるやうだ。それだけに航海や地理に對する智識の程度も分明するわけだ。が、相當な智識階級には地球儀を前にして見當を計つて小首をひねつたものに相違ない。

古句質疑

蛭子省二

質疑小規

(一)質疑は古句に限ること。なるへく古句の出所を書添ゑて置くこと。(二)質疑ははがきで一人一回一問のこと。(三)質疑のはがきには住所姓名を明記すること、但し誌上の匿名は差支なし(四)一度答へた句、末番の句等については答へない。(五)質疑應答は必ずしも先着順ではない研究の餘地ある句は次號廻はしとする。質疑輻輳の場合も又同じ。(六)質疑は必ず本社宛のこと。

時知らぬ娘はいつも二十なり

質疑者　三笑（大阪）（四八ヘン）

富士山の句ではないでしょうか。若しそうこすれば、學ぶべき傾向の作ではありません。古人には斯る遊戯半分の、ものが喜ばれたのかもしれん。

時しらぬ山はいつでも二十なり
孝靈にうまれて今二十なり
日本の一人娘は二十なり
おもかげも變らず今に二十なり
五岳三山はものかは二六山
十三七つまだ年は若い不二

時知らぬを冠した句には、

時知らぬ山入り夏も布子なり
時知らぬ山に出てくほとゝぎす

伊勢物語に『富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白うふれり。

時しらぬ山はふじの嶺いつゝとて
かのこまだらに雪のふるらん

その山はこゝにたとへば。比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、形は鹽尻のやうになんありける』

富士研究では震災で逝去された曾我部一紀氏がオーソリーチで、最近富岳寺さんから左文翁選の狂句富士百首を頂いた。富士の異名はいくらもあるが、平凡寺の宗寶に三十三記してある、富嶽、藤嶽、塵山、常盤山、見出山、東山、御影山、三上山　和合山、二十山、穀衆山、七寶山、三重山、四面山、養老山、仙人山、蓬萊山、不二山、富士山、風土山、不盡山、富兒山、芙蓉峰、風詩山　福智山、新山、紛陣山、羽衣山

口先で日和をくづす美しさ

質疑者　秋太郎（神戸）

雨乞小町です。鳴風氏が此の句を評して『口先で』の句は物やさしい感じを與へる綺麗な句だ。小町の美しさが一二句で

よく浮んで居る、と陳べてみにますが。私は斯の種の作風は避けられるなら避け度いと思つてゐます。『口先』などは殊更な表現の仕方ではないでせうか。雨乞の句は非常に澤山あります、『川柳六歌仙』にないのを二三掲げて置きましよう

ことはりを雨乞共に百度 いい

小町の歌で面影のかはる稲

雨に名を殘して花の色はさめ

雨乞はよめど一生身はぬれず

雨もこひ袖をも乞ふた緋のはか

この歌とその句で稲はほつと息

敷島ですれはことはり納受なり

ぬばたまを遣ひ覺へて片じまひ

（拾遺、寶暦、故事）

質疑者　柳　閑（東京）

故事の敵とのこと故何かあるわけなれど不明。因しこれも駄勞解ですが、青横吟であろうと思ふ。

知患が出て日暮から行く片仕舞と全く同曲ではないでしようか。片仕舞とは三分の花魁を畫一歩二朱夜一歩二朱とわけて賣る事であ。ぬばたまは夜を現はしたので。道樂の經驗がつめば遊び上手になる。

烏羽玉の我黒髪も亂れ

ずに結び定めよ小夜の手枕

いとせめて戀しき時は

烏羽玉の夜の衣をでかぞ寢る

うつつにはあふよしもなし

奴波多麻能よるのいめにを

つきてみえこそ

『ぬばたまの』は月、夜、夢、暗、寝なごの枕詞である。（以下次號）

死と夢

久流美

世に信ずべきものなし

信ずるものはおのれなり

おのれ信ぜざれば取る道は死出ならむ

夢にあふ人と現實に又あへり

その姿いづれも同じ

夢即ち現實と思へば苦樂の別なけれ

募集句

外科

前田雀郎選

工場の皆んなで外科へかつぎ込み　彩秋
外科醫から戻ると近所寄つて來る　千鳥
かき廻すメスの痛みをあとで知り　錦魚
喰ふものが喰へて入院倦きて　鳴穂堂
手術室醫者大股にやつて來る　杏三
痛いのはそつち持ちだと荒療治　滄海
外科室を先づやれ〳〵の顔で出る　夢中
外科醫ぼ父が一しよについて行く　柳一路
あやしても外科醫子供になつかれ　默童
繃帶を外科醫やたらに卷いてくれ　正春
これしきの傷かと外科そつけなし　志郎
叱言より先に外科醫へ負ふて行き　同
この村に外科醫淋しく住んでる　三郎
外科室のドーアを重く押して入り　同
暦に外科醫の紋日あり三りん亡　京郎
繃帶が尋ね合つてる外科醫院　同
手術にもう馴れて近頃本を讀み　金鐵子
手術服笑へぬ人になりすまし　同
象の足程繃帶を卷いて出る　源坊
仕込杖ついて治療にやつてくる　同
愛兒のは人に任せる外科醫なり　萬よし
これしきの手術へメス光り過ぎ　同
外科室のそとで待てる運轉手　醉夢
外科室は今夕刊に載る負傷　同
内科とも外科とも書かず田舍醫者　柳秀
もう濟ん〳〵だと外科醫縫で行き　同
外科室の骸骨コトリ風に向き　伴内
女房の手術に亭主呼び出され　同
(秀)婦長も外科で鍛へた皺が見へ　茶撫郎
晩酌に二針と聞く外科の妻　砂塔
自動車で外科へくるのは指の刺　町二
外科の控室に無口な兄と座し　與詩夫
はつきりと片輪になつて退院し　千鳥
(人)切る事を考へ通す外科醫なり　錦魚
(地)少し斬り過せし外科醫思へば　彩秋
(天)外科室を出れば近所の人の顔　耕水

川柳書架（廿七）

柳多留初編

校訂　今井卯木　花岡百樹　校訂

▼「本書の複刷に就いて」をぬくと、

誹風柳多留の原本には異本がある、即ち元刷本と改刷本とがある。此の原刷元綴本は珍として容易に手にすることが困難がある。在來活字本となつて流布されてゐる柳樽は何れも元綴本を定本として校訂發行されたものが尠い、因由する處は元綴原本を校訂者が見逃がした不注意の結果であらうとおもふ。柳多留の定本とすべき完璧の活字本は如上の理由により今日迄出てゐない、當會はここに鑑みるところあり、柳界の先輩者今井卯木、花岡百樹、兩先生を囑し之が稿を草するに丁り又柳界の篤學者岡田三面子先生から貴重なる藏本を解綴して元綴本に據り丁數の序列を改綴して貸與せらる。更に原序と奥附の復寫を企圖するや、則ち完全なる別の元綴原本を送り、此の企を援けらる。乃ち本書に挿入の原序と奥附は先生賜ものにして謹で感謝する。其外校訂者の苦心と圍到なる用意と相俟つてこゝに本書を發行し得たると、竝に造詣深

タイピスト

川柳作家としての成功は着想の豊富と修字の練熟とが最大要件であることは言ふまでもない、一つの題を課せられ之れに向つて作句する場合は、その題に對しての着想を得るには左から見、右から伺ひ、縱から窺き横から調べ、或は遠くから近くから、若くは外面から内面から種々に考究すべきである、今回タイピストの集句を、こうした作句修練の一法に對する便宜上にもと三四に分解して選して見た、即ち外觀のタイピスト、タイピストを背景とした句、タイピストを中心に即ちタイピストたる人物を材料にしたものタイピスト自身の主觀、情念としての句、並にタイピスト業務とその寫生感想等に分けた、外觀のタイピストは句がすらりとして内容に皮肉味があり、タイピストを背景にしたものは繪を見るやうな心地がして嬉しく、タイピストと其著の情念の句には深味があり業態の句は深刻である、今月の集句は頗る多く、出句者五十餘句、數六百餘章であつたに對し、選句數が少なく嚴選に過ぎた感がないでもないが句稿は充分慎重に拜見したつもりである、終りに「川柳雜誌」投句家諸氏の健康祝福する。

外觀のタイピスト

事務服を取つて女の身たしなみ　郊村

御近處へつん〳〵でたタイピスト　萬よし

大島濤明選

タイピスト指輪が何かよく光り　默童

タイピスト出たほや〳〵を羨ませ　突支坊

タイピストまだ世馴れざる挨拶し　竹雪

タイピスト尻に敷きそな顔で來る　夢中

(佳)タイピスト可愛げなのは辨當箱　錦魚

(佳)タイピスト皆〳〵な美貌といい提げ　町二

タイピストいつも化粧が行屆き　籬楓

(佳)タイピスト滅多に結ぶ日本髷　鮎美

タイピストを背景

しんとした晝タイピスト丈けの音　聞路

タイピスト暮れ行く街の人となり　郊村

社長室の飾りになつてタイピスト　柳一路

事務室を洋裝で出る　蒿蹊

タイピストくつきり白く路次を出る　柳秀

(佳)タイピスト輕い勞れに然を明け　與詩夫

タイピストを中心

事務員にもつタイピスト名を知られ　翠峯

妹をそこまで連れるタイピスト　耕水

タイピストしいたげられた親と住む　千代二

タイピスト養子と意見合はぬなり　鮎美

タイピスト兎角世間をうるさがり　同

タイピスト歸れば店が暗くなり　砂塔

タイピスト孝女と聞けばそれに見へ　金鐵子

テキパキと戀もして見るタイピスト　同

き飯島花月先生の序を賜ひたることを深く銘謝する次第である。今校訂者今井卯木先生病篤しと、更に第二第三編以下のる訂を煩はすの切なる秋、切に快癒を祈校。

昭和二年七月下院

柳書刊行會編輯部

▼昭和二年八月二十五日發行。和本菊半截四二枚。定價金八拾錢。發行所は岐阜市金屋町二丁目十一番地柳書刊行會。

▼柳樽初編の完全なる校訂本である。原本が非常に高價であり、且つ宿易に手に入りかねる際、此校訂本の復刷は當を得たものであらう。

歌句集　沈默塔

森立名著

▼本書は森立名氏が印度方面へ旅行中に詠じたる短歌、川柳、俳句其他を集めたので其序をあぐれば、

暑さに眠れぬまま想湧くまま枕評のメモ殘に認めたのがたまつた、腰折や駄句も旅の思出なれば棄てられず、樂屋落もそのまゝによせあつめて御笑覽に供ふ。

昭和二年七月

▼菊半截五一頁。非賣品。

家政婦になりタイピストに手が汚れ　夢人
タイピスト江戸川亂歩讀み續け　太路
結婚を秘密にしてタイピスト　笑人
(佳)タイピスト理想に生活夢が立ち　夢中
病む母があつて陰氣なタイピスト　伴内
タイピスト母と出る日は太鼓にて　京郎
(秀)タイピスト不意に休んで騒がせ　同
タイピストお尻を課長に向け掛け　光哉

タイピストの感覺

タイピスト後ろに摺れる氣配あり　聞路
タイピスト或日課長の眼を感じ　源坊
タイピスト冬を指先から感じ　茶撫朗
母といふ心に遠いタイピスト　金鐵子
タイピスト背筋へ嫌な息が來る　郊村
(秀)タイピスト誰は知ぬ名を覺る　醉夢
(佳)タイピスト社長の癖を心得る　萬よし
タイピストこんな文句を赤く打ち　鳴穂堂
淋しさを白粉に消すタイピスト　東城子

タイピスト靜かに指を見つめてゐ　花蝶
さ、舟
歐文の係りタイピストの誇り　町二
(佳)タイピスト憎然として打損じ　京郎
タイピスト社長の愛を量り兼ね

タイピストの業態

(秀)タイピスト打つ手の裏に影がある　三郎
話されてタイピスト又打損こね　幸泉
原稿の一字わからぬタイピスト　彩秋
稼いでる强味を見せタイピスト　金鐵子
タイピスト日の仕事は紙の高さ　醉夢
(佳)タイピスト一字忘れた手を休め　志郎
タイピスト一日文字をなじりつけ　富久雄
タイピスト一人離れた暇があり　千鳥
タイピスト私用も同じ音で打ち　二水
タイピスト給仕の留守を使はれる　幸泉
タイピスト機械のやうな指を持ち　町二
(感吟)タイピスト疲れた指で讀み返へ　疎柳
タイピストフト叩く字を見失ひ　同

道具

◇　東洋鬼選

三等車大工道具をあぶながり　耕水
道具箱汚い意地に畜まるだけ　千鳥
道具箱片輪同志を合せて見　同
釣道具提げて浴衣の街を拔け　同

三條東洋鬼
岩崎柳路　共選

出た度びに道具が殖える新世帶　同
古道具高う買ひます暗い店　郊村
賴母子の工面に道具屋慣れ居る　金鐵子
大屋根へ大工道具を忘れて來　幸泉
面白い醫者だが道具錆びて居る　鳴穂堂

川柳と常識

酒井由女三

私は思ふ。――

句會の開會前、司會者が席題に苦しんでゐて「鎌月さん何かいゝ題はおまへんか。」と聞かれた事があつた。其の時は別に題を用意してゐた譯でもなかつたので、ふと思ひついた儘「桃色、ではいけませんか。」とやつた。

自分でも餘り感心す可き題でもないと思つても居たし、それを採用されやうがされまいが、そりや何うでもいゝ事なので、何んでもないのだが、其の人の云ふ事がグツと來た「狹いでんな。」私の神經へビンと來た云葉が是だ。私は其處で、思ひ切り笑ひたかつた。腹の底から笑ひ度い氣持ちがあつた。「大變に卓越された常識で御座いますね。」と。―

「川柳家の眼」と云ふ題の路郎氏の御話があつたのを私は聞かれなつたが、大方こんな事を說かれたのではないかと思ふ

成程桃色と云へば、常識的な眼から見れば狹い、そしてニキビ文等の厭味もある。だがこの桃色を、もう一歩進んだ藝術と云ふ立場から見ると、決して狹くはない、かへつて在來の題なるものから見れば、或意味に於ける現代的な廣い色彩

道具箱何べん見ても鍾はなし　默堂
愛の巣の月賦で道具買ふと決め　京都
佛具屋は佛の埃たゝいてる　伴内
こつそりと呼ぶ道具屋につけ込まれ　町二
未亡人古い道具に氣が退けて　鎌月
大切の道具ばかりに下女困り　花蝶
世辭に賞めれば調子づく艶布巾　滄海
宿替へと云はず道具屋呼びにやり　柳二
道具屋へ或る日刑事が尋ねて來　同
良い客と見た道具屋お茶を出し　九柳
夜逃げとは云はず道具を賣拂ひ　同
道具朽ちず求めて今は三代目　奇骨
引越しはしたが道具の置き處　同
言譯の道具にも成る藥瓶　二水
道具方冷たく役者の顏を見る　翠川
大掃除屑屋へ惜しい品であり　萬よし
釣れたのを燒いてチャブ臺恙なし　同
默想の水屋を嗅ることと頻り　同

秀　逸

何も可も新しく妻と二人きり　夢人
東京へ大工道具の箱と着き　鳴穗堂
煙草入拜見なゞ御意を得る　萬よし
拍子木が鳴ると逃出す道具方　源坊
道具屋のつけ値へ病臥の妻が起き　町二
行商の道具へ雪の積む日なり　鎌月
古葛籠ブンと昔が匂ふてる　同
値に惚れて買ふ古道具に夜店の灯　與詩夫
(軸)道具市惜しみ壞はれへ腕を組み　東洋鬼

◇　柳　路　選

道具方素天邊から下を呼び　千鳥
置きかへた道具に家の廣くなり　翠峯
手鞄を提げて易者は塲所をかへ　蒿蹊
道具方今日は初日で暇が入り　默童
道具建すんで柏子木鳴り響く　柳秀
相當に暮して居たと云ふ道具　突支坊
一つ箱買ひ足して行く新世帶　夢中
新世帶道具の足らぬ日を過し　もとじ
引越したが道具の置き處　奇骨
轉宅であかるみへ出る古道具　木三
引越の道具に金魚邪魔になり　翠川
道具方月を出すのがちと遲れ　兎絲子
一室は化粧道具で飾られる　照葉
道具だけ出した近火の禮に來る　醉夢
大道具金槌さした終座り　鳴穗堂
道具屋は買へば儲けた積りなり　九柳
此の俺をさては道具に使つたな　さゝ舟
臺所にニュームが光る新世帶　町二
言譯の道具にもなる藥瓶　二水
道具屋は八幡筋をせまくする　柳々
茶の道具告代買うた終で果て　京郎

と見る事が出來る。

不滿は女薄桃色に見せてゐる

是でもいゝんだと云ひ度い。

それからも一つ、私を眞ン中にした例がある。この間の覆面句會席上。蜻蛉と云ふ素敵な題が出て、相當な佳句もあつた樣だ。私の句で前技になつたもの

春の日の戀に蜻蛉がおとづれる

實に恥しい、感傷主義の飛沫を浴びた自分乍らいやで堪らない句だが。其選者一言して曰くだ。「實に早い蜻蛉ですとさ」—か。

私は情ない感じがする。桃色だから桃の色でなければ—、春の次は夏でそれから秋だ蜻蛉は夏が過ぎねば來ぬ—。なんて云ふ非藝術な觀念だらう。川柳には如何にも常識は必要以上のものだが。それだと云つて、何もかも一の次は二と云ふ風に考へてゐたのではならない。是からの川柳は一の次が三であつても五であつてもいゝのだと私はさう考へてゐる。

常識的頭惱から藝術的頭惱への發達、其の時こそ我等が滿願成就の日である。

川柳を目方掛けて何うする。物差で量つて如何する、詩を握らうとして詩情の衣を破つたのでは何んにもならぬ。是からの川柳家たらん者はすべからく常識の鐵兜を捨てよ。

川柳の松江（三）

麻生路郎

畫前に一行四人は不二綱君の案内で、松陽新報社に米村あん馬氏を訪れた。氏は松陽新報の柳壇の選者で、同時に島根柳壇の熱心なリーダーなのである。氏は喜んで我等一行を應接室に招ぜられ松江に對する感想を求められたが、未だ親しく觀光を終えてゐない私たちにとつて、これと云ふ感想らしいものもなかつたので、宿から眺めた宍道湖の風光を讃美し、市街の繁華と文化的設備の行屆いてゐる點は、同じ位の人口を有する阪神間の尼ヶ崎市や西の宮市などよりも遙かにすぐれてゐる樣に思ふと云ふやうなことを語つた。松江情緒の句はあとからまとめて送ることを約して別れた。氏が島根柳壇のため如何に努力してゐられるかは毎日の紙面を見れば歴然たるものがある。

新聞社を辭した一行は小泉八雲先生の舊居をおとづれるために街を北へ北へと進んで恰度、城の北部まで行つた。

「此處です」

と不二綱君が指した家は、昔の家中屋敷で東洋趣味の八雲先生がいかにも喜ばれさうな家であつた。先生は其家の事を次のやうに述べてゐられる。

「今度の家はその昔地位低くからぬ武士の住まつてゐた家中屋敷で、此家とお城の堀端の道路との境には、上を瓦で覆ふた長い、高い塀がある。低い、廣い石段を登ると、寺にある程の大きさの門がある。そして門の右に塀から突き出でた木像の鳥籠のやうな、大きな物見窓がある。門の中側の家までの通路も、兩側とも壁に圍まれてゐるから、前からは、ただ白い障子を閉めきつた玄關が見ゐるばかりである」

私たちの訪れた根岸邸（八雲先生の舊居）は先生の筆にされたものと少しも變つてゐないので、右は私たちのまづい説明に替へるために藉りたのである。

内玄關から刺を通じた處が、

「お客があつても差し支へなくば上つて下さい」

との事に、御迷惑とは思ひながらも、せつかく此處まで訪れて來た事とて、先生の居間や、庭前を拜見させて頂く事にした。

玄關を上つて左へ進むと南の庭に面した四疊の間があつて、其北側に接して、十疊の間があつた。

此處で主人の根岸氏に會つた「此部屋が先生の居室で、書齋を退かれると、椽近く座を占められ、庭を眺めながら、夫人とお話をされたり、來客に接しられたりしたお部屋です。

此部屋ではいつも、日本のきざみ煙草を喫ふてゐられました

この居室の北側の六疊が先生の書齋で、夜はこゝでいろんな原稿をお書きになつたところです。先生が椅子にお懸けになるのは此の書齋で卓子に向はれる時だけです。この書齋の前面には蓮池の庭があります。これは先生の最も好まれた所で、次の如くしるされてゐます」

と根岸氏は先生の言葉をかりて庭のありさまを話された。

ひとときほり、お話をうかがつた一行は暫く、其俳趣味な庭先を眺めてゐた。其處には先生を偲ぶに尤もふさはしい陰影の多い庭があつた。其時の感想が

蓮池へ今でも藏の影がさし

根岸邸きさみをのんだ事もき

などの句となつたのである。

この庭についても八雲先生の筆は詳細を極めてゐる。

「この庭には大きな樹はない。青い石か一面に敷いてあつて中央に小池がある；；湖水を模したもので、ふちには珍奇な植木があつて、中には小島があり、それには小山と丈の低い桃の木と、松と、躑躅がある。其のなかには高さは一尺にもたらぬが、百年以上も經つてゐるのもあるのである……然し此池は本來は蓮池であつてこの池の美觀をなすものはその蓮なのである。葉が始めて舒びる頃から、最後の花の落つるまでのその驚くべき生長のいちいちの形象を氣をつけて見るのは、一の樂しみである、殊に雨の日に蓮を見るのは面白い。大きなコップ型の葉が池の上高く搖れながら、雨を受けて少時はそれを湛へてゐるが、葉の中の水がある高さになれば、莖が曲つてザンブと音立て、葉を空にして、又元の樣に伸ぶ。」

これ等の記事を讀まれたならばこの庭のありさまか髣髴として諸君の眼前にうかぶであらう。

嚮て一行は主人の厚意を謝し求めらるるまゝに署名を殘して此の世界的文豪ラフカディオ・ヘルン先生の舊居を辭した。

松江市長高橋節雄氏が八雲先生に對する記念講演をされた其の記事が松陽新報紙上に出たので一々切りぬいて送つてもらつたがこれ等の記事は私にとつて更に耳新らしいものであつた。

×

小泉先生の舊居を辭した一行は、奥谷町の眞光寺へと向つた寺の後ろの 稍々 こだかい所に、鳥根柳壇の恩人 村穗珍馬氏が眠つてゐた。この地に全く緣者のない珍馬氏は未だに、墓標のままで樒なども枯れるにまかしてあつた。珍馬氏は松江市盲啞校の教師から轉じて、松陽新報社に入つた人であるが爾來十數年、山陰の川柳會に重きをなしてゐた人である。後に山陰民報社に招聘せられてからも絶ねず松江の柳界のために盡されてゐたが、大正十三年九月十三日、僅かに四十二才で遂に永眠されたのである。

青砥不二綱君は珍馬氏の墓前にうや〳〵しく禮拜して、我等一行の墓參を報告した。私たちは不二綱君の敬虔な態度にうたれて、墓標にぬかつき、故人の冥福を祈つた。

眞光寺の本堂へ戻つて、故人の遺墨や、全國川柳家の追悼句などを見て、更に故人を偲び、心ばかりの香料をそなへた。

不二綱氏の語るところでは、毎年其の忌に川柳家の墓參があるさうである。私はさうした眞摯な後輩を持つ故人を羨やみながら眞光寺を辭した。

×

一行四人は、その夜の八時すぎの大阪行夜行列車に搖られて東へ歸ることになつた。

二柳子も、萬よしも、かほるも、私もお宮の屋根に鳩が並んだやうにして車窓に首をつき出した。プラットホームに立つて見送られた柳友は青砥不二綱、松丘町二、金津穗波、久方清皆、熊野粹溟人、木村三雷波、宅和喋期、奈良井仙坊の諸君となにわ舘主であつた。

大阪のやうなあはたゞしいところに住んでゐるものにとつては斯うした見送りがどんなにうれしいものであるかは想像外であらう。それは蓮の葉にたまつた露の玉を見つけたやうな美しい喜びにも比すべきものであらういつまでも、一人々々の顏が汽車の搖れるにつれて搖れてゐた。一行は翌十二日に大阪へ歸りついた。そして僅かの日程ではあつたが實に愉快な歌枕であつたと云はなければならないと云ひ合つた。殊に柳友諸君から隔意なくもてなされたことはいつまでも〳〵私達の心の底深く印せられてゐて月日の流れゆくと共にます〳〵はつきりと美しく輝く夢となることであらう。

柳翁の靈を祭りて

—献句祭當日の情景—

藤里藤園

朝來霽雨相半ばして氣をもました。去る十八日の午後一時より我社が嘗て豫告して置いた、『川柳献句祭』を天滿宮社報部後援のもとに、同宮參集所にて滯りなく奉仕致しました。

會場は二十疊敷四間ブッ通しの廣いものでありましたが、定刻迄には意外の來會者の爲に皆様に窮屈な想ひをしていたゞいた事を私は御氣の毒でなりませんでした。社友先輩諸氏の御盡力で、會の式次第は順序よく進行致しまして、午後一時四十分に兼題『先代』を締切ました。

續いて午後二時より大廣間の式場で、御祭典に移たのであります。

式場正面の床（三間）の周圍を羽二重の几帳で圍ひ、中央に御帳臺（神座）を据へ、其左右に朱塗の内侍燈籠が一對燈してあつて、其前に白木の八脚案が据へてあります。更らに脇床には喜多輝月氏筆の梅の圖の金屏風で圍んで、吉田きよし畵伯の『柳翁像』が掛けてありまして、朱塗の八脚案が据へてありました。

一同が着席致しますと神職諸氏が、修拔の行事をし、續いて降神の作法に移り、中央に菅公を脇床に柳翁を招き奉て、献饌を兩方へ數名の神職の手から手へと、運ばれました。輝月氏の『默々』として神主なにか運んで居』のやうに寂としてゐる中に、裝束の衣ずれの音のみして、眞に森嚴なるシーンでありました。献饌に續いて兼題を一括して（未選）文臺にのせて、是亦同じく神職の手

で献ぜられ、祭主は一同の平服裡に莊重なる口調で左の祝詞を奏上せられたのであります。

掛巻も畏き天滿宮の大神達の御前に神職瀧本清一郎恐み恐み申さく。是の小床に御影を掲げ安置奉る初代川柳翁は實名を柄井八右衛門と稱なへ。往にし享保の三年に江戸淺草に生れ給ひ名士を勤めけるが天性風流の道に長け斯の道に深く分け入り勤しみ勉めて初代點者と成りけるが。寛政の二年齡七十三歲にて可惜身沒り給ひしも。其功績は永く久しく傳はりて今に到るまも川柳の流れ盡くる事なく絶ゆる事なく。大和歌漢詩等數多く有るが中に最も短かき文字以て。千々に喚き萬に句ふ言葉の光も清く美しく。鬼神も憐れと感ぜ人の心も和らぎ樂み。世を敎へ人を導き吾も悟り得て敎訓草と繁り榮へ行く隨に翁の功績を偲び。又斯道の流を汲み其惠の露に潤へる諸人達。點者麻生路郎を始め諸々廣前に添い拜みおのがじし作れる句をば持ち捧げ献じ奉りて。今日の永月の仲の八日を生日の足日と選び定めて報賽の御祭り仕へ奉らくを。惟神も平けく安らけく宇豆那比聞しめし添り集へる諸人等に八十禍津日の禍事有らしめず。各のも各のも身も健やかに業の道彌榮へに富み足らはしめ給ひ。しずの斯の道彌廣に彌奬め進めし給へと。乞ひ願ぎ申して稱辭竟へ奉つらくと申す。

路郎主幹は神前に進み、玉串を捧げ、其場にて選句せられて直に披講致されました。それより徹饌、昇神の行事を終へて献句祭は終了し、御神酒を頂戴して、一同は再び會場に移り、席上題『神』の互選を源坊氏の披講により始めました。それが終る之松郎氏選の『袴』の披講を致しまして、本殿前にて一同は紀念撮影をしたのであります。

馬行氏選の小鳥の披講、路郎氏の『句作雜考』の紀念講演も終り、徹饌を一同に配布して散會したのは、日も西に川頭く頃

でありました。

楓林氏は遠く南紀田辺港よりわざ〳〵御出席くださつた御熱心には私は大なる感銘を得させられました。

關西漫畫會の柴舟氏きよし氏等は、しきりに麗筆を振つていたゞきました。左に掲ぐる寫眞は其一部であります。

朝鮮の蛭子省二氏夫妻よりは献句祭舉式中に、『ケンクサイラツ、シンデヨウハイス、セイ、マス』との電報をいたゞき、東京の久良岐氏よりは『天滿宮』と神號を謹書せられて御送りくだされ、東京の千代二、柳路外數氏よりは激勵の御手紙に與りました等此貧弱なる催しが斯く迄センセイションを興したかと思ひますれば眞に欣喜に堪へない

―献句祭參列の人々―

寫眞解說 前列向つて右から萬りよ・しよき・幹主・路郎・しよ・舟柴・江しよ・坊支突・子昼朱・路聞・一多喜・…列中・悟郎・彩峯・ほか・るひしろ・行馬・松郎・二柳子・炭車・源坊・山石紅・花化・蛍月・樂・柳々・舟人・川翠・人想・郎司青・人素・琴人・臣朝・鮎美・眠聲・冷笑・溪水・明半・水新・不滅・三笑・林楓・山飯・朝紫・木三・二久郎・陶山・白水・子柳・木・雨樓・河柳・舟孤・楼雨山・坊剛金・田福・門長・園藤…列後…・香加・仙毒・葉双

四二

次第であります。各自短冊に御認め願いました豪題被選句は、去る廿五日午前十時に執行せられました、月次祭に本殿神前に献じ大滿宮文庫へ保存するやう取り計らひました。

社告

本誌の募集句の締切は從來毎月十日であつたが編輯の都合上今後毎月五日に繰上げることになりましたから嚴守して下さるやうお願ひします。他の原稿も同時に締切を早めることにいたしましたから其のお積りに願ひます。

編輯局

道頓堀小品

庄　萬よし

○今遺言するなれば

一、告別式は、上かん臺の上に寢棺を据ゑ北を入口こし東を出口こし、午後四時より六時まで知友の告別を受くべし。僧侶の讀經、吊文等總し無用。

一、毎日の作品は墓なれば改めて木、石又は、コンクリートの墓を作るべからず

一、告別式後、大阪灣中央にて丑滿咱水葬に付すべし、屍體は人これを厭ひ、魚これを喜べばなり。

一、妻子の身の振り方は神佛の司ごる處にして、自ら豫言する勇氣なし。

○作家と選者

作家は法悦の信者なり。選者は推理の說教師なり』作家は自然陶醉し、選者は自然を批判す』。作家は感激に打たれ、選者は感激を分析す』。作家は唄ひ、躍り、飛び、舞ふ、選者は鹿爪らしく舞臺に端座す』。幸福は作家にあり、面倒は選者にあり。』選者は惱み、作家は救はる』。

○創作とは

鵜の眞似する烏ではない、カアと鳴く烏である』。ベン〳〵ダラの寫生ではない眞髓をつかむのである。』葉の動くので風を知り、眉間の皺で振られたなど、合點するのである。』蟻の戰爭に人間の社會を考へ、『ワラビ』の遭難で○○海戰を描いて見るのである。』着物より眼の輝きを見、建築より執務ぶりを見るのである。』慣怒にあらずして忍耐であり、享樂にあらずして滿足なのである。』精進の終點でなくて、向上の道程である。殿堂の偶像を拜せずして裏町に如來を見出すことである。』

月見の前の宵

―三笑機の句―

蛭子魔十女

▲竹馬。私（對話）

三笑さんから、九月號の十句を、批評して貰ひ度いと、お便りがありましたヨ何んとか御返事なさらなくては、いけないでせう▲今月は氣分がソワついて、新聞さへ滿足に讀めない、又ふたりで憎まれ口でも叩くか、若い人だが、怒るような性質ではない、ごの句が女の眼に映るかネ、サア、わかりませんワ

仲人の下駄を娘は見に降る

信心か知らねど母の出がちなり

を頂戴致しませう▲前句は確かに佳い、卒直な作品の少い折柄、自然に眞實性の姿が現はれてゐる、川柳境は複雜味を單純化する所に藝術的要求をもつてゐる。詩的喜悅に透徹してゐる、後句は大に落ちるヨ、

信仰か知らねど母の出がちなり
信心か知らねど姑出がちなり

詞の持つ刺戟は穿鑿を要する、信心は年寄くさく、信仰には若さがホノみゐる、信心は佛教的、信仰は基教的とでも云へる、下五に對して母と姑の區別も作の上での技巧となる、傳統觀念は容易に打破が出來ない、その力强さを活かすのが、詩人の業でもある、綠雨の『ひかへ帳』に『平常は襟垢の黑み渡れるも心に懸けしことなく、大丈夫を以て任じたる男なりしが、一夕途に誘はれて門を入る時帽子なりと買換へて來れば宜かつた、襟垢

日曜の朝寢に目立つ襟の垢

慨して川柳家の『襟垢』吟では佳いのを拜見し得ませんワ、そんなに襟垢の句が特に興味をひくのかネ、まだありますヨ綠雨は『長者短者』にも、『汝を呼ぶは金の事、潮世罵俗の大文字こいふも、所詮は隱せぬ襟垢の俳味のみ、聞く者の寒きにあらず、言ふものゝ寒きなり、嘲罵せんよりは嘲罵せられん』、俳味と云つてあります、遂に女は襟垢趣味です、川柳家以て如何んとなすか、だつてモガにはそんな趣味はないぜ、

ふたり目の婚を二夕親急いでる
不渡の日が近づくに櫻さき
藏へ來て父によく似た聲が出る
妻もセルを着た髭でも剃らうか

前二句は無難、後二句に於て『聲が出る』を『聲に成り』としたい、『妻も』よりは『妻は』としたい、三笑さんには『相談』の句が澤山ありますネ其内

相談に歸つた次男髭が延び

が佳いと思ひます、かうゝふ句は作り古されてゐる、穿らとしても新味がない

鑛山を降りる毒婦の貯めてゐる

も『毒婦』と云つてしまふから、單なる興味中心に墮する劇的の說明化で、文字以上の想像性が許されなくなつてしまふ一般に近頃の句は、性急な傾向が認られてならない、

性慾と食慾橋で別れたり

は同君の作中一番の惡句だらう、僕の云ふ新狂句の一種だ、古狂句には

思案橋ろくな思案の出ぬ所

で吉原へ行かうか、堺町へ行かうかと、思案橋上の思案などは詩ではない、机上の作と云ふ評がありますなら、

醉ふてきた女形舞臺のくせが出る

▲そうだ、こね上げた句で過渡時代にはよくあつた、作句には信念問題が附隨する、內生活の內生命から泌みて來なくては、抽象性なメソッドに、過ぎなくなる

まける氣になつて算盤おいてみせ

三笑さんが他の模倣をせずに、自己を突

き進めてゆかゝ事を望む、惜い事には未だ、表現の上に感激の融合が、ピッタリときてゐない、洒落本黄表紙等を味はつて頂き、現代作家では、荷風、鏡花などに親しむで貰つたら引締られる點があらう、耽美性な方面に己を見出されるであらう、風邪聲がこれませんネ▲秋風が立つこと是だから悲觀する、アストマエキスを服もうか。

花嫁か息子か？

久流美

路郎氏の柳樽評釋中（川柳雜誌九月號）

朝めしを母の後ろへ喰ひに出る

を里歸りの花嫁を詠んだものゝ解釋は當を得てゐないと思ふ。私は矢張り道樂息子の朝歸りと解する一人である、勘當を母が庇ふた時の情景といつてもよい。路郎氏は下五に就て新しい解釋を施されてゐるやうだが、他に澤山ある、朝歸りや母の道樂息子に對する弱い點の句を列記して見ても該句は花嫁と見られぬ。殊に里歸りといふに至つては餘りに現代式の解釋であつて、古句はそんなに深く考へてゐないものが多いのである。この句の平凡が卽ち古人の卒直に表現したまでであらう。敢て他の意見を俟つ。

（九月六日）

東奥の佛都

三井與之助

—平泉中尊寺

（省二）日。與之助氏は自分と同窓出身である實業界に在つては、社の重役、寧ろ東都趣味界の士として、貢献の大なるを感謝せねばならぬ。先年來佛教美術の研究に手を染められ時間許せば京奈良へ入らる、本稿は特に乞ひしもの、若しそれ一讀し去つて、左の古句に及ばば油然として、古を偲ぶの情にかられ、肺腑を貫く何にものかがあるであろう。

兵の夢のあとゝふ歌枕
衣のほころび下から先へぬひ
ほころびを引張りあつてよんだ歌
貞任は賞屋が貸さぬ歌をよみ
貞任は衣を楯に矢をふせぎ
宗任が生捕られたは春と知れ
九重にかほる東夷の梅の花
ひまな時辨慶やすりなどを出し
橋普請するかとおもふ衣川
十二年野糞を宮城野へたれる
擂釜の煙たゝ〳〵十二年

今夏奈良佛教美術社の主催で、中尊寺を始め松崎瑞巖寺其他の臨地講演が催された、自分には何れも曾遊の地ながら、天沼博士や源豐宗氏の講師だけに、去る十五日出發十六十七日三聽講をした。

蚌子兄から是非其感子を書くやうにこの事で筆を執る、然し專門的の說明記事等は、面白いものでない、殊に紙面が許さないから案内記のやうな概念的のもので、御紹介するまでゞある。

春霞と共に都を出て白河の關で秋風に逢ふと言はれた邊陬の地悚ろしい夷の地梅の花だんべいと云はせるつもり（古句）鼻へかゝつた音聲で年をへし（同）等と莫迦にされた東奥の地も、王朝の末、後三年の頃には、既に京都文化は、充分に移殖され、消化されて意外の發達をして居た、之も六郡切つての廣濶な平

野と惠まれた天産物、例へば砂金、馬、米穀、毛皮、鷹の羽等豐富な經濟的充實にもよるのである、當時此地方よりの貢賦は、朝廷の内努に重要な財源をなした事は吾妻鑑等に明かである。

安倍氏平定され、義家の歸洛の後を承て、奥州の目代となつた、藤原清衡（秀郷の裔）は寛治六年鎭守府將軍に任ぜらるゝと共に遽に大勢力を得て六郡を併有し、陸奥押領使として赫々の權威は全奥羽を壓するに至つた、嘉保元年豐田館を去り、新に平泉に移り、子孫永住の地と定め、大に土木を營み　東稻山、山北上川の山水を京の天地に擬し、鋭意中央文化の移殖を努め、以て藤氏三代豪侈と榮華の礎石を置いた、加羅の御所、柳の御所を始め多くの舊跡に、徵するも如何に壯なりしかを窺ふべく、當時人は、之を奥の御館と尊稱して居たのである。

開山中尊寺　當時は佛敎全盛の世なり、清衡素より厚き信仰を有し、長治元年といふに、南奥州の門口たる白河の關より、北の端外ケ濱に至る、行程二十餘日の往還に、一町毎に金色阿彌陀佛を描いた笠卒都婆を、立てゝ國土安穩を祈つたが、其中心點として特に平泉西山山頂の平地を擇んで、多寶塔を置き、釋迦多寶の像を安置し、之を最初院と名づけた中尊寺は實に此に濫觴するのである。

即ち天仁元年更めて堀河天皇の勅を仰ぎ、大工事を起し、一國の貨財を傾けて前後十五年の歲月を費し、天治二年を以て始めて竣成、供養を行はれた事が、願文に存して居る。

伽藍建立の規模は、總鎭守として日吉山王を北隅に勸請し、一山の中心金堂を始め、釋迦堂、雨界堂、二階大堂、三重塔婆の數實に、四十餘宇、坊舍三百を算し、當時密敎造建の法に則り、山間溪流に臨み、徐に輪奐の美を極めたる事は想像の外であらう、特に今に殘る金色堂の如きは、清衡の建立で、最も造營に力を致し、海内の珍物、異域の奇材を蒐めて建築の料とし京の名工を集めて之に當しめ内には珠玉を鏤め、七寶莊嚴を施し外壁四面には塗るに黑漆を以てし、貼るに黃金を以てし、渾然たる金色、燦然たる美觀は、最も人を警倒せしめ　時人之を呼んで光堂と稱した、當時は北上川に映る光の爲めに、鮭か溯らなかつたと迄云はれて居る。

清衡の子基衡父の遺圖を繼ぎ、更に毛越寺を興し、其子秀衡に至つて別に、無量光院を建てた、毛越寺は堂塔四十餘、坊舍五白、規模の雄大を誇り、無量光院は宇治平等院に倣つて建築の富麗を誇りたるも、然も境域の森嚴と堂塔の美觀は遂に中等寺に及ばなかつたらしい。

然るに豚兒泰衡統を繼ぐや、鎌倉の大旗早くも白河の關に飜り、秋風に草木

の露を拂はせて、伊達の大木戸先づ破れ流石奥州の覇者も、天下の大兵を邀へては敵すべくもなくて、北方深く遁走し、杏梁桂柱の構へ、麗金昆玉を藏し、三代榮華を恃りし、平泉の居館も一朝にして焦土と化するに至つた。

爾來七百餘年、春風秋雨、時勢は幾變轉する中、一と度は兵燹の厄を免れたる中尊寺も、延元二年野火の幻火に見舞はれ遂にさしもの峻宇高門も、蕩然として燎き盡さるゝに至り、僅に金色堂と經藏だけが災厄を免れてこゝに、千古誇るべき美術も辛うじて、今日其一部を貽し得たのである。（〳〵）

死ぬまでの川柳

奈良井仙坊

水郷の美を情緒を賞でに來松された路郎先生・庄萬よし氏、橋本二柳子氏、高橋かほる氏のために開催した歡迎宴會の席上で私は路郎先生と席を隣にして坐つてゐました。未だ曾てお目にかかつた事もなく、お話をした事もない先生とかうまで親しく臨席する事の出來たと云ふのも皆自分の生命と信じてゐる川柳の上からであると思へば、一生川柳のために、いな發展のために、努力しなければならないと痛感いたしました。冷しビールの醉がだん〳〵と廻つて來ました。先生は私に一人靜かにかう云はれました。『僕も貴方の樣な若さ、十七八の頃から川柳を作り出したのですが、まだ〳〵是から川柳のため一仕事しなければならぬ責任を持つてゐるので、なか〳〵死ねない。貴方を見ると つく〴〵川柳を作り初めた時代を思ひ出します』。と云はれて先生の川柳に對する努力（これからも一仕事あると云はれた）。は實に涙ぐましい尊いものだと深く〳〵感じたのであります。生死の境にある病院の寢臺上で『週刊朝日』の川柳を選されたと聞いて、その眞劍な態度、努力を思はずには居られない私も川柳雜誌社のため路郎先生のため十分に盡さなければ松江支部を引受けたことに對して誠に濟まないと思ひました。まだ私は若いのです。だから是非川柳雜誌社のために、川柳のために、一仕事しなければならないと思つてゐます。さうした覺悟をこゝに述べさせて貰ひました

（二、九、十一日記）

柳珍堂の頭

日野國明氏がひとの頭を氣にするのは友達仲間では隨分古い談話でいつだつたかも醉つた紛れに徘人の松村鬼史の髮の毛を鋏でつみ切つたことがあつた。鬼史はいつも頭の髮をてかてかさせてゐるので聞いた人であつた。――猫の微笑――

各地柳壇

川柳献句祭

――初代川柳の靈を祭して――

九月十八日（齋日は廿二日　午後一時から天滿宮で初代川柳の百三十八年祭を壯重な古式の下に〻行いたしました。來會者六十名主幹麻生路郎氏の献句の神前披講が終つて、記念撮影をいたしました。次いで披講と講演と關西漫畫會員柴谷柴舟、吉田きよし兩畫伯の會場スケッチ等があり、朝鮮蛭子夫妻よりは盛會を祈る旨の飛電があつて、頗ぶる盛會を極めました。（藤園記）

路郎、朝湯、松郎、清、柴舟、琴人、かほる、突支坊、聞路、半明、悟郎、山花紅、青司郎、双葉子、柳河樓、新水、翠川、想人、舟々、源坊、毒仙、白水、長門、不滅、木三、二水、柳々、久郎、悟道樂、金剛坊、山雨樓、溪水、炭車、よし江、一選、朱昼子、馬行、英次郎、飯山、嶺月、麥郎、朗舟、覺市、孤舟、冷笑、朝臣、眠聲、鮎美、彩峰、柳子、柴朝、萬よし、加香、楓林、素人、多喜女、三笑、藤園、二柳子

兼題　先代　路郎選

先代は人に頭を下げてゐた　山雨樓
先代の名をそのまゝに善次郎　助三
酒か好き先代呑むとよくはなし　眼聲
言ひ譯は先代の恥さらけ出し　杏三
先代け唯にこ〳〵と働きし　三休
先代にお眼にかゝつて泣かされる　楓林
先代の屋敷受けて出す氣のへ百屋　金剛坊
やゝこしい子があつて先代恨まれる　山房老
先代の出入りに息子意見され　柴朝
成金になつて先代浮かばせる　左馬
先代を知らない嫁の彈くピアノ　悟道樂
先代玉垣に先代の名は太く見ゐ　瓦雄
町内の寄附に先代まきぢつてる　那郎
先代の遺志に反してビルヂング　燕柳
先代の出所大金出して買ひ　ひろし
光つてるものは先代からのもの　同
先代は俳畫も一寸書けた人　かほる
先代の法事に一人粋な人　同
先代の妾の子とは知らざりき　酔峯
大小を捨てゝ先代店を持ち　同
先代の德を御客に敎へられ　毒仙
先代と意氣の合ふたは遠さかり　同
先代をなぜか近所は悪く云ひ　源坊
先代もお好きでしたと女將彈き　同
先代はこの風呂敷の程背負ひ　舟々
先代はさゝいな事に捉はれず　同
先代にすまぬと母は聲を下げ　彩峯
先代のお墓は過ぎた嫁をとり　同
盛衰は先代からの墓に見る　露斗
貧しさは先代からも諦める　同
お辭儀ばつかりしてた先代　松郎
又しても先代樣が口に付き　十字路
先代と共に稼いだ別家なり　彩秋
金ヶ羅へ來て先代の德を知り　鳥越
先代が慾で貰つた兄の妻　朝臣
先代はも少しものが判つたに　孤舟
先代と名は變られど大分ぬけ　馬行
先代の槍一筋で子爵なり　一選
人力車だけを先代知つてゐる　聞路
先代の梅の定紋古く也　長門
先代が殘した鍋がさびている　きよし
子に何も讓る物なく樂に死に　素人
先代は横綱なれど母に似て　琴人
先代の知慮か殘つた廻り椽　柳々
先代に聞かされた程値にならず　二水
先代に親類の知らぬ子があつて　木三
別莊の味先代は知らず仕舞　突支坊
先代の遺產を誇る下司な人　よし江
先代の良いとこばかり聞かされる　溪水

先代がのこした赤い煙草入　同
先代は運もあつたが働いた　飯山
先代のつかつた金は生きてゐた　同
先代の日ですと嫁は髪を結ひ　久耶
先代の故郷で妻を探してる　同
先代のまじなひ今に人が來る　同
先代は唯働いて死んだのみ　明荷
先代の時とは違ふ付け屆け　同
先代へ申譯ない事ばかり　同

選者吟

先代は自分でせねば氣がすまず　路耶

席題　袴　松耶選

青春を黒い袴ですごして來　たき女
先生が袴で來ると若く見に　よし江
ぬぎ捨てた袴の紐が顏へくる　鮎美
救はれた樣に袴をぬぐ早さ　柳々
しびれたは袴の中で足をもみ　二水
しわくちやの袴で來るも天理教　嶺月
父今日は袴をはいてすなほなり　閑路
禮裝の袴が立てば風があり　一選
柳翁忌袴のすそをたゞすなり　朱唇子
從卒が袴をはくと背が高し　かほる
相續へ袴をつける日の續き　萬よし
口上を云ふだけにいる袴を着　飯山
香具師ながら折目正しい袴なり　馬行
孝行と云はれて袴はいで出る　同

席題　小鳥　馬行選

よい座敷小鳥の箱で暗う住み　新水
兩隣小鳥でまうけてゐるらしい　双葉子
小鳥屋の門にいつもの陽があたり　松耶
尼寺の頃小鳥飼うてゐる　素人
二三羽が小鳥屋程に殖に、來る　山花紅
夫婦愛小鳥の世話に暇を入れ　鮎美
父親は又小鳥熱吹いてゐる　よし江
小鳥市今夜も同じ顏が見に　炭車
小鳥飼ふなとはあいつらしくなし　舟々
泣き話しこげつぱれしで鳥の世話　突支坊
子澤山その上小鳥までも飼ひ　溪水
飽いて來た頃を小鳥の値が上り　紫朝
お姜の小鳥に水と粟が足りず　三笑
座敷より小鳥を褒めて客歸り　新水
籠の鳥自分の相場知らぬなり　源坊
隱居所は小鳥ばかりを持ち込まれ　同
小鳥籠まだ齒磨を使つて居　山雨樓
散髮屋小鳥の世話も馬鹿にせず　同
(佳)掛け値が掛値へ小鳥賣て行き　かほる
子供より先に小鳥を尋ねられ　聞路
小鳥市女房の方が袖を引き　不減
せきせいに四日座敷に踊ること　悟道樂
訓導もつひに小鳥を飼ひ始め　萬よし
カナリヤの心がわかる許嫁　松耶
鳥籠に向へば女房よくしやべり　同
(人)爭ひへ籠の小鳥が眼をみはり　源坊
(地)おひひてる小鳥飼主又變り　想人
(天)不愉快な日ある小鳥の水は切れ　眠聲
(軸)小鳥また大きな鼻に覗かれる　馬行
小鳥から夫婦暫く思ふこと　同

席題　神　互選

神に仕へる身で言葉荒すぎる　柴舟
浮滇者は神も佛もなかりけり　翠川
久々の歸省鎭守の森が見に　青司耶
神棚へ卒業證書さゝげて居　秋水
はつきりと神の御利益生駒見せ　想人
さら〳〵と落葉の音も社なり　悟耶
背の子も神の前には手を合せ　半明
神樣を怖れぬものに蠅一つ　鮎美
神樣へだけはその譯申上げ　冷笑
見通しの神のまに〳〵汗をかき　萬よし
拜んでるうちに神樂が鳴り始め　紫朝
神樣へ嘘は申さぬ質になり　加香
死の線に立つて神佛頼むなり　琴人
絶對のもう神樣に頼むだけ　眠聲
神掛けた禁酒に今は苦しがり　溪水
高麗犬は揃つて神へ尻を向け　源坊
神の前青年團は眞面目なり　舟々
神樣の前でほんとの我を見せ　毒仙
乳母よりも子がお神樂の眞似に馴れ　山花紅
神も子も違ふ神頼み　孤舟
車井戸もり神樣靜なり　一柳子
神榊へ光りの朝の恙なく　一選
ながんてる神へ老婆の眼は見ぬず　よし江
神德の深さ氏子も榮ゆるなり　朱唇子
苦しさを神樣だけに打ちあける　突支坊
神の前いつも頭をさげるだけ　朝臣
何も彼も忘れて立つた神の前　柳々
神樣は笑ひ給はぬだけのこと　山雨樓
默々と神主なにか運んでゐ　嶺月
つゝましう石段おりる神まゐり　飯山
何樣のやしろと知らずながんて居　水三
敵味方神の御加護を信じて居　同
神樣はどちらに勝たそうかと迷ひ　二水

神前の後は氣樂な二人旅　同
神のある事も極道知つてゐる　閑路
切髪の母に神樣あるばかり　同
寄附なんど以ての外と神思ひ　馬行
神樣のこゝにも夫婦氣が違ひ　同
神木へ藝者は何か祈つてる　炭車
神樣へいつもと違ふ祈り言　彩峰
神に住む心安さへ子が生れ　ひろし
神樣でなしそんな事解るかい　素人
御神前ヅボンの膝の痛い事　同
賽錢の方へ神樣氣をとられ　路郎
靈あらばなどと神樣ためされる　同

珍珍堂忌

九月六日午後七時から端の坊で柳珍堂忌を營みました。命日は十四日でありますが社の都合で六日に繰上げたのです。游二郎氏の好意で同氏秘藏の一人の遺墨を前にして句作に耽りました。路郎先生は「柳珍堂の逸話」と題して興味の深い講演をされました。當夜の參會者は左の諸氏です。(二柳子記)

路郎、紋太、游二郎、松郎、醉夢、炭軍、久一佳山、遼々、湘里、一波、白帆、九柳、一路、柳子、突支坊、嶺月、かほる、夢中、加香、和兵衛、冷笑、鮎美、源坊、舟々、翠峯、一醉、久郎彩秋、六郎、素人、三笑、飯山、萬よし、ひろし、松壽、木三、二水、柳骨、二柳子

墨（席題）　路郎　選

代書人入用だけの墨をすり　飯山
酒の氣をかりて老師は墨を持ち　突支坊
墨痕あざやかにことわられ　萬よし
書置の堅い覺悟は濃い墨　佳山
氣を變へてまた氣を變へて墨をすり　鮎美
墨をすらせて何も書かずに寢てしまひ　素人
おそろしさすつて終つた墨のいろ　松郎
二女三女行儀正しく墨をすり　同

初日（席題）　松郎　選

風のある日に初日があいてゐる　紋太
但し書よんで初日に行く氣なり　夢中
結ひ立の髪に初日の灯の明さ　和兵衛
九分通りはいつてゐたの初日なり　嶺月
雁次郎だけが光つた初日なり　一路
初日から嫌な苦手と顏があひ　突支坊
榊などがへて初日の家を出る　佳山
頭取が初日の舞臺のぞいてる　遊二郎
初日らしくいつぱいのかぶりつき　ひろし
耳かいてゐるへ初日の幕があき　飯山
舞臺から見れば初日にひいきがゐ　彩秋
初日だけきまり藝題でもめてゐる　萬よし
長三郎初日に汗をかいてゐる　かほる
半劵初日の木戸へ二人連れ　琴人
(軸)初日から貧けてげんくそ惡いなり　松郎
(同)難し方初日の客をあなどらず　同

子澤山（兼題）　紋太　選

子澤山一人一人が無理を言ひ　さかえ
にこりともせぬ男にて子澤山　素人
それぞれの帽子をきせて子澤山　萬よし
子澤山入退營がひきつゞき　煙仙
子澤山あるがまゝなる日をくらし　飯山
子澤山お目見得だけで下女は來ず　吟女
子澤山疊すへこむひとゝこゝ　遼々
三男を伯母が引取る子澤山　彩秋

子澤山またあんばんの土産なり　ひろし
子澤山親孝行は一人きり　炭車
子澤山父賴母子が空になり　一醉
すき燒にお膳が邪魔な子澤山　同
(人)出雲屋へあと戻りする子澤山　悟郎
(地)夕刊が來てもめてゐる子澤山　柳子
(天)子澤山他所へやる子がないと云ふ　二柳子
(軸)子澤山まだ十年は働く氣　紋太

敷布（席題）　互　選

新らしくなつた敷布手足がうんと伸び　紋太
尼寺に敷布を干せば鳥が來る　松郎
卷煙草敷布へすまぬ灰がおち　一路
前栽に敷布の影がひるがへり　佳山
泊り客二人敷布が足らぬなり　かほる
心地よいその夜敷布の肌ざはり　冷笑
かたすぎる敷布の中で旅の夢　ひろし
そりやにげたなと敷布へ指が追ひ　源坊
敷布まで歪めて床で子のさわぎ　醉夢
眠むたさは敷布をしかぬまにころび　一醉
雨の朝敷布の型が顏につき　夢中
敷直しても敷直しても子の敷布　琴人
敷布からはみ出してゐる長襦袢　素人
蚊張をはみでた敷布と團扇　游二郎
利きすぎた敷布の糊に秋を知り　鮎美
夕燒にしつかり敷布こはばつて　三笑
洗濯の敷布にうたゝねしてしまひ　柳子
夜遊びの足か敷布で叱られる　同
嬉しさは宿の敷布に延びく　白帆
竿竹へ敷布一枚幅をとり　同
疊替した日敷布も買うて來る　嶺月

蚊帳の中敷布が白く誰も居ず　同
伸びて行く力敷布をしわにする　萬よし
敷布ばかり洗ふ女房の肥にて來る　同
その涙敷布新らしすぎるなり　路郎
せめてものもてなし敷布換へてゐる　同

川柳雑誌社 糸屋町句會（大阪）

九月一日夜　川合舟々報

川柳雑誌社の支部になつた、糸屋町の九月例會を一日夜府立博物場の脇正面に於て催し、當夜主幹麻生路郎先生が御出席されて「超穿らと川柳、今後進むべき川柳」と題する講演があり、參會者三十餘名の盛會裡に散會しました。

兼題「無口」　路郎氏選

無口には眼をむいたのが芝居めき　翠涙
口數をきかないだけに憎り　源坊
無口者とつと先へ橋を越し　赤城
無口さがつい氣にかゝる二階借り　ひろし
このごろの無口母親ふと氣付き　京二
搗き混ぜてみたい女房のかしましさ　椋仙
古本屋無口の中によく儲け　佳山
代書人無口の儘に釣を出し　同
帶に手を入れて無口は窓に立ち　飯山
心安立に無口をたしなめる　同
姉藝者無口の方へ坐るなり　舟々
もう發車するなと無口思つて居　同
初對面無口言ひたいこと言はれ　同
(人)來た時は無口であつたゲーム取り　二水
(地)徘徊明う無口の鼻が光るのみ　松郎

佛

（天）無口者自分が云ふた程　笑ひ　一醉

兼題「行李」　松郎氏選

柳行李自分で洗ふた物を詰め　かほる
もう一度行李開けさす守り札　萬よし
メリヤスのシャツが行李に嵩を取り　佳山
おなごしの閑は行李を開けてゐる　聞路
驛までと手を貸す行李の重いこと　燕柳
出立の行李へ母は佛間に居　鮎美
間に合ふて行李ドツコイショと下ろし　京郎
行李から利息ばかりの通が出　三笑
行李にはあつても下女は漂着をし　新水
嫁そつと行李の底へ手を解れる　瓦淳
心配を兄に掛けどうしの行李　舟々
女親だけに行李へこまやかし　同
出世して歸るつもりの行李をしめ　飯山
あけてから考へてゐる柳行李　同
柳行李はや大阪へつきにけり　路郎
行李どつかと下女の太さよ　同

席題「村長」　互選

村長は日々谷へ迄の野心なく　湘里
大臣をつ造た樣に村の長　原三
村長の苦手は小作爭議なり　瓦淳
村長は保險會社の代理もし　双葉子
人格はまた村長に再選し　新水
入營に村長一々禮を云ひ　染子
村長の姿やそうな町に住み　ひろし
村長の訓示論語を嚙んで出し　蒼梧樓
村長はやはり角袖着て歩き　久郎
村長を賴んでやつと仲直り　二水
村長の世辭は嫁の方へ向き　金剛坊
村長の今日くつろいだ紺絣　京郎
村長が通ると鍬の手を休め　源坊
此の村で一人村長はんの髭　京二
傘借りに來た村長へお茶が出る　壽仙
村長の家に先生とまつて居　翠峰
村長になつて田甫が少しへり　三笑
村長の息子としての懸をする　佳山
村長の世辭を畑の中で聞き　聞路
再選再選村長ぐつとはげ　一醉
近道をして村長は歸るなり　舟々
村長は高い山から踊るなり　かほる
鑑査役固と村長もした男　萬よし
村長の勸め海兵團と決め　同
村長はまあぼつぼつと治める氣　飯山
村長の後から話し話し行き　同
成程〳〵と村長判を押し　松郎
金山寺味噌で村長朝がすみ　同
二重橋村長ひとり見て戻り　路郎
村長を訪へば植木の虫を取り　同
村長はあれも我子のやうに云ひ　同

席題　花賣　互選

花賣は娘の嫁くを知つて居り　二水
花賣を待つてたやうに娘呼び　新水
花賣を素氣なく汽車へ駈けつけ　金剛坊
花賣は呼ばれた家をさがしてゐ　双葉子
花賣へ日はかん〳〵と照り續け　久郎
箱入の娘が花を賣りに立ち　染子
ごみだけは殘して花賣歸るなり　湘里
命日を敎へるやうに花屋が來　彩秋
花賣の時に國をたづねられ　赤城
花賣の村に戻つた長い影　佳山
花賣が來ると丁稚の用が出來　京二

花賣の急に鋏を見失ひ　舟々
花賣のこれならまかるやうに云ひ　飯山
花賣は花の中から如露を出し　聞路
六七分賣れて花賣り心太　萬よし
花賣に聞けば夕立あつたらし　翠峯
賣上げをよむ花賣へドンが鳴り　三笑
花賣は二つちぎつて子に持たせ　毒仙
花賣が來たら呼んでと母せはし　松郎

川柳雜誌社

螢ケ池句會（大阪）

安西杏三報

九月四日未だ殘暑烈しい中を集る者十八名本社から二柳子馬行兩先生と多忙の中を萬よし先生が馳け付けて下さつて種々柳界の話を承り得る處多大であつた。此句會にも新會員が四名も顔を見せて下さつた事は大きな喜びであつた。

吳服屋　兼題　二柳子選

モスリンを丁稚氣前を見せて尺し　光哉
吳服屋は光づ亭主にも世辭を云ひ　龜鶴
吳服屋はもう秋と云ふ色を見せ　月仙
臍繰り初孫の初着買つて來る　中山
連れだつて吳服屋を出る若夫婦　寒郎
吳服屋の膝へ新柄擴げられ　彦春
吳服屋は年より若い柄を見せ　るい子
吳服屋の娘洋裝よく似合ひ　邦郎
吳服屋の丁稚一人が早ふ起き　谷師
吳服屋に言はずと皆なよく似合ひ　刀四郎
臍くりの分を吳服屋心行て　馬行
吳服屋の前へ巡禮も立止まり　昭

此柄新柄ですとうまく言ひ　同
吳服屋薄暗くして居る　杏三
吳服屋をいとはん少し拗れて出る　同

佳吟

縞柄をほめて番頭買はせる氣　一閑
暫文に近く吳服屋夜を更し　彦春
吳服屋は拗れて來たとは知らぬ顔　其象
吳服屋をチト草臥れて二人出る　杏三
吳服屋で娘あれこれと迷ひぬき　光朗
冷ゑ切つた風に吳服屋店をしめ　昭郎
吳服屋を見れば追剝ほどに負ひ　馬行
セキセイに吳服屋少し世辭がすぎ　同

寢臺　席題　馬行選

宿替のベッド出ずに氣が引けて　邦郎
寢臺に夜晝ぞなき身の淋し　光朗
寢臺の晝へ小猫は眠をつむり　光哉
寢臺へ髮すかぬ日の續く事　葭舟
拔け出でたベットの溫みさはる母　邦文
ベットドからベッドへ渡す新聞紙　同
寢臺へ起床叭喇が鳴り響き　新三郎
新兵のもう寢臺になれ切つて　同
絕對安靜ベッドの上のまる二年　昭郎
面會へ無理な體を起き上り　同
退院も近くベッドによく眠り　刀四郎
寢臺にあまつて布團重たそう　同
据えてから此奴はいかん北枕　安居
寢臺で一つ宛聞くレシーバー　同
寢臺へ靴のまゝ寢るチャップリン　同

佳吟

カーテンを降せばベット待つて居る　葭舟
病んで居る寢臺に蟬秋を告げ　刀四郎
見舞客寢臺の顏見違へる　玉政
寢臺に疊三枚駄目になり　月形
寢臺が今年は涼み臺になり　中山
寢臺の窪み其儘我が姿　光哉
寢臺を何時迄友とするのだろ　谷師
寢臺へ看護婦さんのつめたい手　新三郎
（軸）寢臺をひよつくり詩人くらし起き　馬行
獨り者いつそ寢臺の小半年　同

本棚　席題）　萬よし選

失せ物に本棚迄が探される　光哉
本棚の内の子供のませた事　其象
本棚がつまつてカーテン取外し　月形
本棚へ金文字だけを前に置き　中山
本棚のすみで鼠の巢を見付け　玉政
本棚は應接室に備へられ　るい子
本棚に巾をとつてる辭林なり　二柳子
本棚の何れも半分讀んだだけ　馬行
本棚に金文字がチト草臥れる　杏三
本棚の一輪挿がしほれてゐ　同
本棚へ足らない丈を伸び上り　一閑
本棚のぎつしりつまる挑みよう　同
本棚にかこまれてゐる近眼鏡　同

佳吟

本棚へ足と欠伸を届かせる　葭舟
本棚に一冊拔いたすきが出來　二柳子選

年寄（席題）　瓦

寺詣り年寄だけと思ひきや　玉政
年寄ればゞ度で濟むを三度云ひ　勝
年寄と意見も合はず家出する　彦春
宮相模年寄ればとて仲間入り　龜鶴
年寄に聞けば明日は雨と云ふ　葭舟

年寄は年寄らしい説を述べ　邦文
年寄は嫁の仕事を孫に言ひ　紫海
お祖父さんよし〳〵と碁を圍み　安居
年寄の車夫に引かせてしらぬ顔　新三郎
年寄と云はれたうなく動いてゐ　杏三
朝風呂を出た年寄へ陽が高し　其象
年寄のもうプロペラに仰向かず　同
孫に手を引かれ敬老に行き　中正
年寄の晝眠をさます孫の聲　同
ひた〳〵と額に年が寄つてゐる　寒郎
云ふた事云ふて年寄嫌はれる　同
孫連れて今日、人出へ困り果て　昭郎
年寄の其健康を聞かされて　同
若返法と云ふのへ憧れる　一居

朝戻り新聞配達ふり返り　映紫朗
停留所新聞賣りの聲もきゝ　同
被害者の噂もつた新聞紙　花孤
夕刊をばかない聲で賣つてゐる　字人
日曜日新聞借りに隣りから　天痴人
やゝおくれ新聞雨にぬれて來る　同
新聞を年寄ゆつくりよんでゐる　仙坊

川柳雑誌社　**松江句會**（松江）

幹事　奈良井仙坊報

川柳雑誌支部例會を秋の蟲しきりに鳴く仙坊奄に開催した小雨にも拘はらず遠く郡部から天痴人君が出席されたのが非常に嬉しかつた。（仙坊記）

雑題「新聞」　五　選

新聞はまだかと主人店へ出る　祥月
新聞を幼な子供の手から受け　路風
新聞を受り母は病氣はやんでゐる　醉歩
雨の街ちを平氣で走る配達夫　同
朝寢坊まだ新聞をよむ氣なり　鐵扇
それとなく見る新聞でおどかされ　同

席題「あひる」　大空天痴人選

趣味のある池にあひる五六匹　醉歩
あひるなどみつけて騷ぐ男の子　映紫朗
朝もやの中にあひるのおよいでる　仙坊
（人）あひる這ふ子供あひるにおてはれる　祥月
（地）はすの葉の影であひるが二匹居た　醉歩
（天）おとなしく泳いであひる又戻　映紫朗

五分間吟互選

二百十日ほどなく雨ですぎてゆき　祥月
遠足が氣にするほどの天氣なり　仙坊
雨だれの音きゝながら眠れない　天痴人
巡禮も雨宿りする俄か雨　鐵扇
雨降りの窓打つ夜を病んでゐる　らん馬
雨宿りついでに煙草買ふときめ　映紫朗

席題「雨」

席題「夢」　村松醉歩選

初奉公夢々さめつかれず　映紫朗
破産した樂しい夢に文が立ち　天痴人
成金になつた所で夢がさめ　仙坊
（人）新婚の妻に濟まない夢を見る　天痴人
（人）孫の死に夢かと思ふ程あきれ　祥月
（人）夢で見た旅行危險なとこでる　鐵扇
（地）茶話會に俺も〳〵と夢のやう　字大
（天）滿願の日あり〳〵と神が立ち　路風

席題「小説」　黒目映紫朗選

針仕事夫は小説讀み聞かせ　秀清子
小説へ讀んでる内に涙だぐみ　同
入院は小説も讀みたい氣にもなり　花孤
（人）汽車の旅嫌な小説フイとよみ　仙坊
（地）小説の毒婦へ好意もてぬなり　花孤
（天）小説をよんで娘の悪い息　仙坊
（軸）小説など讀まさよと醫者は云ひ　映紫朗

奈良井仙坊選

夢醒めてふと寢床をはねて起き　映紫朗
一萬圓夢で貰つた使ひ道　花孤
夢を見て笑ふ我が子のいぢらしさ　天痴人
新緑の丘で巡禮夢を見る　亂歩
新婚の旅も夢の裡にすぎ　映紫朗
夢で見た旅行危險なとこでさめ　鐵扇
驚ろいた樣に夢から聲をあげ　同

席題「役場」

奈良井仙坊選

村役場給仕退屈そうにねる　字人
役場員乞食一人もて餘し　花孤
この村のずつと向ふが村役場　祥月
應接室すみはきたない村役場　醉歩
村役場奥に百姓らしい聲　映紫朗
（人）役場から歸ると村長庭いぢり　天痴人
（地）村一揆役場の方へどつと來る　花孤
（天）役場もう暮れてチンガリ灯ともり　鐵扇
（軸）村役場呑氣らしい顔が居る　仙坊

川柳雑誌社　**小松句會**（石川）

八月九日　やなぎ亭にて　本田柳一路報

當日金澤から御病氣であつた久流美先生が御出席になり、尙先輩の俵兵衛氏の出席な

どの盛會振で同人組織に就いて色々と御盡力を下された。

腹卷　久流美選

カシガールの樣に腹卷だらり下げ　正流
腹卷をたゝいてゝせる千鳥足　憂士呂
腹卷を抑へて旅寢おちつかず　松水
腹卷へ今日一日のあたゝまり　加賀頭
腹卷をさぐつてくぐる繩納簾　大公坊
（秀）腹のゆるみに夏のやせを知り　みどり
胴卷のんなとこから出るバツト　北山人
腹卷をはたくと銅貨一つ落ち　川柳子
失業　川柳子選

（佳）失業に追はれて今日も集ふ群　富久雄
（佳）失業にあちらこちらへ話しかけ　加賀頭
（佳）失業の耳にはつきりドンがなる　柳一路
無情　北山人選

（佳）蜻蛉の羽が二三人の手にバラバラ　柳一路
（佳）弱きものよ孕んだきり捨てられる　久流美
（佳）淋しさは遂に無情につれて行き　太公坊

俵兵衛居小集（石川）

八月五日　富久雄選

裸

（佳）眞裸追ふて行水前の母　太公坊
（佳）夏休み裸ばかりの目が續き　金鐵子
（佳）アカシヤの裡へ一羽冬枯れる　俵公衞
（佳）番臺の娘男の肌に馴れ　柳一路
（佳）町外れなつて裸の人が行き　太公坊

繪　金鐵子選

（佳）山水の一幅ほめて座にすわり　太公坊
書いた虎子供正直に猫と云ひ　富久雄
名作なると前には網が出來　太公坊

柳一路居偶會（石川）

八月十二日　太公坊

風呂敷を抱え東京驛に着き　川柳子
遺留品らしい包に手をふれす　智久柳
風呂敷に涙で包む子のかたみ　柳一路
（軸）風呂敷を忘れ買物もてあまし

川柳雜誌社　田邊句會（和歌山）

九月十日　辻左馬報

糸屑が大きな尻に付いて居る　明荷
糸屑もおそまつせぬよい娘　胴打
糸屑がまじつて取れぬ古い綿　三休
エプロンの赤い糸屑目にとまり　木の子
糸屑も掃きこんである金魚鉢　同
口說かれて糸屑ばかりこしらへる　楓林
母の立つ袖に糸屑見つけ出し　同
玄關の糸屑そつとつまれる　左馬
糸屑が障子のさんにかゝつてる　同

川柳雜誌社　姫島支部句會（大阪）

九月十五日　水谷鮎美報

短氣

嫁とつた當座短氣がちと直り　朝臣
後悔をしたように云ふ短氣者　さゝ舟
その短氣また會社が首になり　助三
短氣者釣瓶落して戻つて來　鮎美
損だとは知つて居ります短氣にて　石竹
商賣を嫌ひ短氣な姉の婿　冷笑
肝心な話短氣は出てしまひ　眠聲

板　園

板園ひ中でて營業續けてゐ　朝臣
改築にちと長すぎる板園ひ　助三
建築にかゝるでもなし板園ひ　さゝ舟
板園ひ隣の店までがさびれ　同
板園ひこゝらがぱつと開いた筈　石竹
板園ひはや契約の濟みであり　冷笑
板園ひ金槌の音石の音　同
板園ひまた銀行が立つ話　眠聲

正　直

正直なことが旦那の氣に入らず　朝臣
礫死して正直者かと惜しがられ　さゝ舟
正直に店全體を委かせられ　助三
此場合正直だけで食へませぬ　同
あんまりなその正直を叱つて居　鮎美
正直に云へば叱られるかと思ひ　石竹
正直はその日暮しも氣樂そう　眠聲

男の子

男の子姉と一緒に寢かされる　朝臣
酒呑みの父に似るなよ男の子　さゝ舟
軍人になる氣で育つ男の子　助三
活潑にお辭儀してゐる男の子　鮎美
男の子もう母親と湯に行かず　同
この夏は裸ですごす男の子　石竹
ほころびたのを氣にもせず男の子　冷笑
男の子また下駄割つて戻つて來　眠聲

月二會例會（尼崎）

八月廿七日　杉原木三報

出張　松耶選

出張の留守に集金斷はられ　二水

出張と云へば又かと妻は云ひ　虚白
出張と定まれば探す知友餘　吉升
出張へ早う見せ度い文がつき　吟女
出張の留守へ舊友尋れて來　同
地方官出張してる氣でつとめ　木三
隨行の二等列車にがしこまり　同
古い馴染と出張先で逢ひ　原三
父さんはおもちやを買ひに出張し　同
母の小使が出來る出張費　二期
出張先の夢に我が子の水泳ぎ　同
出張の日は何んとなく落ちつかす　如月
荷になると知りて買ふた出張先　同
出張をかれて親父の墓まゐり　同
出張で主任の樣な顔をする　同

藤椅子　互選

藤椅子へやつと出て來た病上り　吟女
藤椅子を買ふて疊のすれる事　木三
藤椅子へぐつたり寄つた洗ひ髪　吉期
末の子が籐椅子さげる樣になり　原三
藤椅子を買ふて奥樣然となり　同
藤椅子に取りよせられる煙草盆　二水
藤椅子によれば夫人の斜になり　松郎
寄り附の知らせ藤椅子立ちもせず　同
藤椅子によれば家令の樣でなし　同
藤椅子の閣下大きく笑われる　同
藤椅子へ電燈一つ消されたり　同

紙屑屋　互選

小鳥でも買ひますと云ふ紙屑屋　木三
紙屑屋露路へ曲つたらしい聲　二水
屑屋を前に夫婦喧嘩がはじまつて　松郎
屑だけの屑屋の背へ琴の音　同
買ふた値を云ふて屑屋に笑はれる　同
門口で屑屋雪駄の音をさせ　同
屑屋へイと行けば大きふ男が出　同

素人居偶會（大阪）

九月十三日　岩本素人報

夕方より降り出せし雨の庭に虫のコーラス止まず、柳談と氣焔と酒落と餘興と醉筆とで夜半に至る、來會するもの路郎、柴舟、柳秀、一徹、かほる、三笑、松郎、萬よし、ひろし、毒仙、翠峰、舟々、新水、琴人、の諸氏と素人。

夜長　路郎選

コツ〳〵と夜長を何か始めだし　琴人
何度眼覺めても電氣のあかり　索人
藤椅子に二度の夜警を聞いてゐる　柴舟
肩入の煙草が切れる十時過ぎ　松郎
本日より鮓始め候セルを着る　萬よし
たのもしい男に見へて夜長なり　かほる
夜の長さ留守はきざみを出て來る　舟々
氷割る音にこほろぎ鳴くを止め　一徹
虫の音で舞臺だん〳〵すごうなり　同
夜長には文ぞんぶんに書けるなり　翠峰
殘暑まだ去らず夫の顔に蚊が　同
どこの子が泣くのか夜長耳につき　毒仙
去てから夜長しみ〴〵身にしみる　同
歌澤の三が切れてる籠の虫　三笑
みゝず鳴いて旦那簾を叱つとき　同
（軸）巽見した方も夜長に困るなり　路郎

悟郎居小集（大阪）

九月十一日　北山悟郎報

安産　松郎選

安産のあとさしに寄る里の母　久郎
安産を母にたのんで勤めに出　翠峯
安産の後へ御守り屈けられ　流星
孕らんでるのが安産を祝ふて來　凡平
安産をちつとも知らぬ人と逢ひ　彩秋
うんから案ずるよりと國へ出し　石竹
安産にかまどしつかりもやされる　ひろし
天理さんにこつて安産してるなり　鮎美
安産を知らせに畑の中を行く　同
安産を知らせばうなづく丈の父　悟郎
安産を車夫はこつそり聞いて來　同
安産の知らせ仕事着なり歸り　舟々
初産なのにまあ輕う出來ました　同
安産を祈る弟からの文　同
（佳）安産を祝ひに來れば抱かされる　十字路

早起　ひろし選

早起きに間へばこの頃月詣り　十字路
早起をして早起の家を知り　舟々
早起きは鼠の取れてる事を知り　閑路
早起に聞けば朝寢をなるがり　久郎
早起の隱居隣の門を掃き　白水
早起の父鍬の柄にけつまづき　燕柳
深呼吸何處かで三番鶏が鴨き　青司郎
たまに來て姑朝の早いこと　流星
早起きの父椽先きにせきがする　翠峰
公休日丁稚ばかりが早う起き　三笑

早起の向時迄つゞくか十姉妹　悟郎
早起へ女房のつそり起て來る　同
起早のつもりへ手紙ばいつて來　松郎
蓉目殘し早起飯にする　同
(軸)早起の亭主薪を割つて居る　ひろし

息　瓦選

慰めてやる手に息がかゝるなり　松郎
息絶えたあとへ提灯馳けつける　鮎美
肩で息しながら嫁はよく動き　悟郎
聽診器醫者は大きな息をさせ　青司期
やすらかに寢息の中で明の事　ひろし
頬杖で大きな息をして見せる　閑路
長火鉢しばし一人の息となり　同
太い息だけで娘の無言なり　凡平
寢轉に寢息が寒い夜と知る　同
子の寢息靜かに妻の手が運び　白水
息のある内にたつた一目だけ　同
一息に呑めとだらすけすゝめられ　三笑
支那そばのラッパの息の長い事　同
寢息止しく丸々と子の太る事　十字路
溜め息の女がスクと立ち上り　同
城　瓦選

久々に來れば古城に蓮が咲き　翠峯
二三羽の鳩も古城の眺めなり　悟郎
初年兵城のいれを聞かされる　燕柳
葉櫻に一雨淋しい古い城　三笑
月が冴えて古城は凄く見え　青司期
蟹のように闇にも白く天主閣　ひろし
底知れぬ井戸あり古い城の跡　同
ロケーションこゝ古城を景にする　鮎美
飛行機は古城の空で寫される　同
古城も鳥の止まるだけの松　閑路
暮れかゝる古城にだれも番もなし　同
踏み入れば古城に芒招くやう　十字路
變哲もなく古城に夕陽暮れ殘り　同

小波川柳會（松江）

田口鐵扇報

九月三日の夜上田兼外居に例會を開く、當夜の收獲は左の如し。

兼題「稽古」　青砥不二綱選

練習の時によかつた事を云ひ　哲郎
稽古とは云へど手荒な聲か洩れ　かほる
負けてから稽古になると云つて置き
お師匠も幼な稽古をふと思ひ　鐵扇
踊り場の更けて稽古の二三人　同
寒稽古無駄だと思ふ日も續き　白扇
寒稽古師匠の槍は恐く見に　白扇
(人)稽古部屋明日の勝負が氣つかれ　兼外
(地)自轉車のけいこはおやぢ横ぴ　秀清子
(天)へとゝにそ先生は隙を吳れ　花孤
(軸)稽古とは思へない程なぐられ　不二綱選

席題「釣」　瓦

留守番の丁稚釣錢間誤付かせ　玉光
おやぢへは釣れず子供はほめられ　兼外
歸りには釣竿だけが那覽になり　白扇
案外に釣れた鰻へもてあまし　ラヂオ
辯當がけ申譯程釣つて去に　花孤
釣竿をたらし呑氣な日を送り　花抓
投げ出した樣に釣竿水にはね　鐵扇

兼題「丁稚」　舟木舟帆選

買ふもせぬ品を丁稚は並べ立て　兼外
客のない店へ丁稚の淋しそう　秀清子
算盤の稽古に丁稚首を曲げ　さし雄
新參の丁稚解らぬまゝで暮れ　仙坊
公休日丁稚と思へぬ風で出る　白扇
幼稚園丁稚の用が一つ殖に　鐵扇
(人)新參の丁稚女中に使はれる　兼外
(地)吳服屋の丁稚はまた事を云ひ　さし雄
(天)大欠伸丁稚に思ふ事もなく　花孤選

席題「髯」　瓦

色白の顔へクッキリ髯の跡　さし雄
芝居とは云へど髯面女なり　兼外
生へた髯伸びほうだいの山男　秀清子
上官になつて鼻髯少しのび　花孤
髮をなでながら子供に年を聞き　白扇
歸省した友の成功髯で知り　鐵扇

兼題「殘」　木村三雷波選

殘り物でもと乞食は平氣なり　ラヂオ
子供まで名殘惜しさに涙ぐみ　白扇
殘り物貰つて乞食生きてゐる　鐵扇
足跡を殘して泥棒逃げて行き　花孤
(人)別れ際名殘りつきぬへ拂ふ袖　鐵扇
(地)送別の名殘に十八番一ッ出し　さし雄
(天)母親の去つても知らず子が殘り　坊仙

二南亂耽歡迎會（松江）

久方清實報

八月九日

大阪高商生の二南、亂耽兩氏が來松されて天神みどり喫茶園で歡迎會を催しました。

席題「夜の湖」　青砥不二綱選

夜の湖へ流され果てた屋形船　春朗
夜の湖嫁ケ島たゞ黒くみる　紅陽
夜の湖それだけの持つはなやかさ　蓮花坊
夜の湖心中する氣が月を賞め　光重
涼み舟唄ひ疲れて戻るなり　亂喋子
夜の湖何か秘密をつゝむよう　舟帆
涼み舟どつちも月へ漕ぐ氣なり　紫吻
闇の夜の湖水は廣く見ゆ　砂詩朗
山影をいだいて湖は夜になり　三雷波
湖にゝうて汽車の灯曲つて來　亂耽
(佳)夜の湖あの灯が村とふりかへ　砂詩朗
昇形船殘して湖の夜が更け　田の字
夜の湖へ儲けた丈けを流され　春朗
夜の湖笑へば何か答へさう　喋朗
夜の湖ボート冷たく乾いて居　二南
(人)灯を消した唄が流れる夜の湖　亂喋子
(地)夜の湖今出た月へ船が見え　穂波
(天)寞切なやうに灯がある夜の湖　喋朗

席題「欠伸」　住田亂耽選

讀みかけの本をまくらに欠伸なり　舞姫馳
折角の欠伸へ返事急がして居　二南
後妻にたまの欠伸も淋しまれ　紫吻
起されて返事あくびになつて出る　砂詩朗
二つ三つ欠伸を出して朝支度　亂喋子
呼鈴へ舌打をする大欠伸　喋朗
行詰まるやうに欠伸を洩らすなり　舟帆
欠伸から欠伸へ姑縫ひつゞけ　二南
(人)頼りない人に欠伸は思はれて　喋朗
(地)きりぎりす欠伸を叱る榛に鳴き　穂波
(天)灰吹きを寄せて欠伸が續くなり　亂耽

兼題「意氣」　楊井二南選

(軸)大臣の欠伸演記へひよいと入り　田の子
行軍の疲れ軍歌で意氣を見せ　蓮花坊
其の意氣で行けと野次馬の二三人　舞姫馳
女房の意氣地子供と里へ行き　喋朗
その意氣でやれと云はるゝ喝乞ひ　舟帆
意氣のない男に戀はしてしまひ　亂笑
意氣地なさ吾が事にして口惜し　三雷波
勝つた意氣大地しつかり踏みしめ　喋朗
負けん氣が何遍行つても投げられ　亂耽
落ちる陽へ意氣揚々と優勝旗　三雷波
(佳)意氣込めば母に一事注意され　喋朗
意氣込んで來る親分へ落着いて　舟帆
意氣込んでゐるのを鼻で聞いてゐる　春朗
この意氣をカラ〳〵笑ふ應接間　亂喋子
意氣合ひが產んだ淋しい戀をする　紫吻
(人)伊勢鰕は死んでも意氣のかたみ　光重
(地)見てゐると後へは引けぬ意氣になる　大鳥居
(天)意氣地ない男にされて事がすむ　羅生門
(軸)撲られるつもりが皆に恐れられ　二南

月二會例會（尼崎）

九月三日　杉原木三報

媒人（兼題）　松耶選

媒人の定音を娘きゝおぼえ　薫
媒人の話をきいた襖越し　如月
出來たのへ氣安い叔父が仲に立ち　二竹
媒人の紋附身幅合ふて居す　原三
離縁から媒人ちつともよりつかず　柳蛙
子が出來て媒人へ無沙汰續くなり　吟女
手をかけた襖へ媒人の笑ひ聲　同
媒人の眼にも產後の肥立よく　吉耶
媒人は嘘を眞にしてしまひ　同
媒人は我千以上に世話をやき　二水
またかいゞ媒人嫁を落ち付かせ　同
媒人を知つて親父もあらたまり　虛白
媒人となれば友達かしこまり　同
家出するとは知らぬ媒人　木三
式だけは媒介人を頼んで來　同
見合の日媒人だけがよくしやべり　同

親類　互選

親類を聞けなる程よく似てる　草戊
落ぶれてみよりの數のへつた事　如川
久々に訪ねば叔父さん癌を病み　木三
お祭りに親類中が顏合せ　二升
親類は死亡廣告だけの事　同
親類へ行つて子供は腹痛め　二水
親類は皆再緣をすゝめたが　同
未亡人へとかく親類口が過ぎ　吟女
親類が多くて嫁うるさがり　同
親類がよつて香奠相談し　柳蛙
一週忌親類の子と同い年　松耶
親類が宗旨の事でもめて居る　同
親類に賢は丁稚さんが居て　同
兄弟の顏を親類間違へる　同
親類へ傘借りる寄り長くなり　同
鯛持つて行けば親類柿を吳れ　同

下駄　互選

あの人と仲居は下駄の音で知り　如月
玄關の女の下駄に目がとまり　柳蛙

念佛講最後まで居て下駄がなし　木三
お土産の下駄もつたまゝれてしまひ　吟女
來て見れば先客らしい下駄があり　同
肩入れの下駄の鼻緒がゆるむなり　松郎
下駄ばかりふゐて夜伽のさびしさ　同
御みくじも大吉下駄の音かるし　同

第九回鼎座吟（神戸）

九月七日　小鐵千鳥報

秋季雜感

蟲の鳴く聲の憐に迫る秋　千鳥
燈下今親しむ頃を馬鹿騒ぎ　同
秋深し桐の落葉の堆高く　芳香子
秋らしうなつたと國の伯父が來る　郊村

相手　互選

ウエトレス相手に少し酔つてゐる　芳香子
相手の仲よく呑み込んだ外交員　同
相手する方も少しはいける口　同
五分五分の強さで將棋よく續き　千鳥
續けさま子供相手のこけてやり　同
思ふたより相手下から折れて出る　郊村

書出し　互選

書出しを配る仲居の二人連れ　千鳥
書出しを店から奥へ廻して來　同
書出しへこないあるかと不思議がり　芳香子
書出しに一人おくれて飯を食ひ　郊村

毒仙居偶會（大阪）

九月十八日夜　八木毒仙報

題　磨砂

磨砂去年の生姜あつた筈　翠峰
磨砂洗ひ切れなく畫になり　赤城
磨砂おひつ古びたなと思ひ　同
磨砂お釜の底を二度洗ひ　染子
磨砂お前は姉に生れて居　舟々
よく乾く事が嬉しい磨砂　同
磨砂客の來てゐる事が知れ　同
磨砂濡れ手拭き〳〵呼びとめる　毒仙
磨砂哀れな聲に買つてやり　同

北國の空（石川）

九月七日夜　安田波奈子報

稻刈のとこへ子守は連れて來る　一葉
霜のおりることを云へば稻を刈り　同
北風に案山子忘れた樣に立ち　同
小説を讀み終つても虫は鳴く　同
秋風に旅藝人の身をなげき　波奈子
秋だけは生れた國を思ひ出し　同

電氣柳壇句報（大阪）

安井ひろし輯

ローマンス殘して外科の患者なり　松壽
糸つなぐまを踊子は拭いてゐる　銀柳
さめるのをきかず友達足袋をぬぎ　同
番傘に古い間屋を見せて居る　郊村
一度ならずも避暑でみる姿　千代二
月給日めい〳〵太い事を云ひ　籬楓
大阪ほめそやし豆飯を炊く女　寶明鳩
白粉もぬらぬ娘で氣が強し　鮎美
朝歸り庇の低い戸を潜り　金鐵子
無雜作に着流しで來てよく喋り　同

泳げないパパ濱風に吹かれて居　燕柳
小口帳もつとも糸が抜けかゝり　柚蘭坊
新兵の肩伸よく街を行き　同
障子入り床の掛字も秋のもの　ひろし

萬よし川柳（三十七回）

凡人　椙本紋太選

凡人の睫毛揃つてよく眠り　町二
涙々の身を凡人にしてしまい　燕柳
涼み臺凡人同志仲がよし　染絲郎
尺蠖へ凡人らしく感じ入り　北斗
長屋中ふだん着のまゝ相談し　千代二
凡人に少し僧ある非凡人　炭車
凡人のこんな裁きへ対辭儀をし　毒仙
社長夜を凡人となる面白ろさ　刀四郎
誘られた凡人同志馬が合ひ　幸泉
天才のあらを凡人見附け出し　笑人
凡人と凡人同じ趣味を持ち　柳秀
凡人の悲しさですと屑屋言ひ　松星
窮屈になれば凡人人を押し　山雨樓
凡人で終りともなる村を立ち　源坊
凡人と言ふれを見る淋しい日　千鳥
凡人にされて社長の怒り樣　太路
大切なとこで凡人つい滑り　志郎
凡人の郷里は水のよいところ　莢豆
(佳)腰辨の一方ならぬ子澤山　千代二
晩酌の平凡人になりすまし　杏三
凡人にどちらでもよい議論にて　同
凡人に使ひ切れない金を持ち　翠峰
凡人へ見へすく樣な世辭が入り　虹の家
凡人の尊き日なり玉の汗　莢豆

遠大の思慮に　凡人恐れ入り　志郎
(人)金々といふ凡人へ物言はず　染絲郎
(地)凡人に健めな子供があるばかり　山雨樓
(天)凡にして裏も表もない男　春陽

次回題「木版」五句、十月十日〆切　溪花坊選
(萬よし川柳三光呈粗景、未着の方は至急申出でられたし)

萬よし隅會

庄　萬よし報

爆風機止めて氣がつく午前二時　三平
爆風機別にあをいでゐる扇子　三笑
駐落に馬鹿丁寧な爆風機　文久
爆風機末座へまでは扇きかれ　萬よし
一と先づは案内人の言通り　濱しげ
先覺者らしく村長案内し　わたる
案内へいゝよいゝよの段梯子　放鳥
晝飯になつて案内酒落を言ひ　萬よし
案内を餘所に氣焰の二人あり　同
案内を受けて段ばしんどがり　莢豆
案内も乞はず暴力ぐいと入り　松壽
しんみりと話の出來ぬ貸ボート　わたる
ボートから見れば可なりの高い月　放馬
名案もなく中元の團扇なり　松壽
團扇から應援團の手が揃ひ　松露
催促に來たのは團扇子に取らず　萬よし

校　門

校門に案外弱い子と知れる　二南
校門に案じる母と得意な子　同
先生の話が門へ來て變り　同
校門を示威運動の旗が過ぎ　亂耽
校門で叱られること思ひ出し　同
校門へ柵の朝顔咲き延びる　同
赤門ゑくぐつただけの髭を置き　萬よし

見　物

こつそりと見物席に交つてゐ　舟々
見物はお城の端でめしにする　翠峰
これしきの話見物興に乘り　萬よし
新入景客滿員の宿斗り　白水
見物も過ぎて家出の思案なり　祇梵

東西南北

▼久流美君(金澤)

路郎さん。あなたとお會ひしてから、もう二ケ月足らずになります、暑い〳〵と言つて汐見橋で偶然あふた雅幽子と三人が、氷屋にセーキをのんだのもきのふのやう思はれる。しかし今は秋です、北國に涼しいといふより寒い晩がつゞきます、一雨ごとに蚊帳名殘りの日が近つきます。

私は又急に住居をかへました。今度は郊外のやうな所です、電車の便はわるいが、酒屋へ三里、豆腐屋へ一里といふ僻地でもありません、樹木の茂つた崖の下の家です。

私の書齋にあてた部屋から、崖の上の家を見上げると五階位に見ゑます、その家と私の家と二軒しか近所に同町名がない譯です。その他に家があつてもみな本多町。

光りをもとめる日が崖に面してゐるから、暗い家ですが、自動車の音をきかない靜かさは讀書と、想をねるには誂へ向きである、崖の上は長谷院といふお寺をめぐつて竹藪です、地震の時は馳けつけるによいでせう。その下はさま〳〵の樹が繁茂してゐます。泉水の中に一きわ目立つは芭蕉の一株です。朝顔の蔓も手入れせぬまゝ長く〳〵伸びてゐます。花の小さいのも自然でよい。

朝顔のちさくみどりに取卷かれ
雨に濡れた石垣の藪菖蒲の搖れるのを、見てゐると、九月はじめとはいへ薄ら寒みを感じます。

椿は實になつてゐます。子供の時「天竺まわり」といつた。茶色づいた實は今の子供にほしがられてゐます。

この秋を、私はこゝに句作に耽るつもりです。(九月六日)

▼飴ン坊、しゆを兩君(東京)

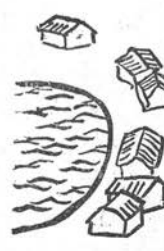
十四日の午後五時十五分に、名古屋から川柳講座を放送致しまして、それが濟むと其足で直ぐ木曾路へ川柳行脚に出かけます。折柄面白いぞゑ木曾路の旅は、笠に木の葉が舞ひかゝる。…頃です

名物の木の葉に咽せる旅衣　近藤飴ン坊

木曾路へ同行。漫畫行脚です。

福島でナカノリさんの奥許し　宮尾しげを

半ケ月程留守に致しますので御挨拶まで。



編輯室から！

▼句作に讀書に懸命になれるころになりました。次回の「近作柳樽」の句が眼に見えて殖えて來たのも、そのあらはれであらうと思ひますが、一層の精進を期待してゐます。

▼本月號は前田雀郎氏の「芥川龍之介氏と川柳」、岩本素人氏の「朧げな柳珍堂の印象」などの特別寄稿があつたことを喜んでゐます。

▲九月になつて新たに二つの支部が增設されました。一つは和歌山縣田邊町の田邊支部で堀楓林君の後援の下に辻左馬君が幹事となつて支部の面倒を見て貰ふことになりました。今一つは島根縣簸川支部で、これは新進氣鋭の尾添雷相君が幹事となつて活躍してくれることになりました。共に堅實な發展を期待して居ります。

▼次には新にお願ひした賛助員と客員の方々を御紹介いたしておきます。

賛助員　文學博士　藤村作先生

客員　都新聞社　前田雀郎氏

同　令井卯木氏

同　篠原春雨氏

▼九月の川柳雜誌社は棚珍堂忌、川柳祭（川柳獻句祭）その他支部句會や小集のために忙殺されました。ます〳〵發展を祈つて止みません。

▼平塚にゐる酒井駒人君は、いよ〳〵十月八日に華燭の典を擧げられるさうです。母堂のおよろこびが察せられます。もう孫のことを話してゐられるさうです。

▼濱寺の太田朝陽君の一家では、八月二十六日に次男の二三郎君が生まれ、翌二十七日には廣島縣竹原で三女の武子さんが亡くなつた報知が來て、早速竹原まで急行したさうですが悲喜交々の有樣に挨拶の仕樣もない始末です。私は先輩の看護をしてゐる時に安産の事を萬よし君から聞ひたので早速、「子が出來て父は祝盃ばかりあげ」と朝陽君のニコ〳〵を思ふて短冊を一葉送つておいたが、三女が亡くなつたことは少しも知らなかつたのです。同情に堪えません。

▼松本助六、藤里藤園、三好革郎の三君は相前後して病臥されました。横田眠聲君も脚氣で二週間ほど會社を休まれたさうです。斯くいふ私も目下病臥中です。

▼西垣松雨君の未亡人悦子さんは、當分郷里但馬へ旅行され、十月中旬に歸阪の上、大阪市西淀川區浦江町一三七日本ペイント社宅西村喜三樣方へ移轉されるさうです。

▼川村花菱氏が九月十一日に上演のことで來阪されましたので翌十二日に道頓堀の宿で暫らく語り合ひました。素人氏宅の句會へ案内しやうと思ひましたが時間の繰合がつきかねたので又の機會に讓つて別れました。

▼九月六日午後七時から、大阪南區清水町の端の坊で柳珍堂忌を營みました。

▼九月十八日午後一時から、大阪北區天滿宮に於て川柳祭が開催されました。當日は天滿宮社報部の方々が色々と御手傳ひ下さいまして非常な盛會でした。席上に掛けられました柳翁の肖像は客員の吉田清氏の筆をわづらはせました。これは社寶の一つとして永久に傳へたいと思つてゐます。

▼川柳祭に參加するために田邊から楓林氏が來阪されましたので、久方ぶりの人々をまじへて散會後小宴を張りました。

▼三好革郎君は大阪府豐能郡北豐島村石橋三〇三へ移轉されました。

▼安川久流美君は金澤市欠原町九へ居を移されました。

▼金宅志郎君は神戸市神樂町三丁目一三八へ轉居されました。（路）

正誤

▼九月號「川柳天の聲」の評註を幸田露伴先生としましたのは内田魯庵先生の誤りでありました。大變な間違ひで兩先生はじめ讀者諸氏に深くお詫びいたします。

▼九月號句會の「山」で、富士登山五合目迄は元氣なりの句の作者、其象とあるは昭郎の誤り。彦壽とあるは彦春の誤りにつき共に訂正す。

▼瀧の音父は呑ませるとこで待ち　路郎と訂正。

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。
▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。
▼締切は嚴守されたし。
▼各地會報は清記のこと。
▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。
▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第四卷第十二號課題

十月十日締切
（各題二十句以內）

▼色街　塚崎松郎選
▼糸屑　麻生葭乃選
▼古本屋　高橋かほる　萬よし　共選

第五卷第一號課題

十一月五日締切
（各題二十句以內）

▼芝居　森東魚選
▼辻占　小西兎絲子選
▼窓　中野柳陽　橋本二柳子　共選

毎號募集

▼近作柳樽（卅句以內）麻生路郎選
▼古句質疑　蛭子省二擔當
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

一部　參拾錢（郵稅共）
六部　壹圓六拾錢
十二部　參圓

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封鍼に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年九月廿五日印刷
昭和二年十月一日發行

第四卷第十號
（毎月一回一日發行）

大阪市西成區千本通五丁目七番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎
大阪市西成區千本通五丁目七番地
發行所　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房　其他市內各書店
（東京仲見世）玉森堂　（神戸）米田　後藤　（金澤）石井
（函館）石塚　（廣島）廣文館　（石川縣小松）マコト屋

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

贊助員

池澤樂居　小酒井不木
大道弘雄　赤井清司
岡本一平　末弘嚴太郎
片岡直方　前田雀郎
嘉納純　小出楢重
田中香涯

客員

伊藤彦造　安川久流美
今井卯木　木村半文錢
西原柳雨　柴谷柴舟
岡田三面子　篠原春雨
川村花菱　森蛭子
吉岡鳥平　東省二
吉田清　魚
武笠山椒

特別社友

國枝史郎　岩崎柳路
藤村作　原史風
藤本卯之助　西本三笑
本田柳一路

編輯局（特別社友）

橋本二柳子　柳川洲馬
竹内多聞　安井ひろし
津田耕水　西杏三
高見柳骨　松本助六
高橋かほる　酒井駒人
横田眠聲　北山悟郎
亀井花童子　庄萬よし
河合舟々　比賀壽みを
尾添雷相　檜山千代二
太田朝陽　藤里園
田双柳　麻生葭乃
中澤濁水　飯山
辻左馬　喜田好郎
奈良井仙坊　革三郎
桑島文絲　路生
矢田右大臣

主幹

大阪市南區戎橋商詰
道頓堀支部　幹事　庄萬よし
大阪市北區南同心町二丁目一
天滿支部　幹事　原史風
大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七
濱寺支部　幹事　太田朝陽
神戸湊町一丁目電氣局西
神戸支部　幹事　庄萬よし
山口縣山口町石原小路
山口支部　幹事　柳川洲馬
東京市芝愛宕町一ノ二六大成社内
東京支部　幹事　岩崎柳路
函館市青柳町五
函館支部　幹事　亀井花童子

大阪市住吉區安立町五丁目
住吉支部　幹事　德田双柳
朝鮮仁川仲町一丁目八
仁川支部　幹事　矢田右大臣
松江市雜賀町一ノ一
松江支部　幹事　奈良井仙坊
岡山縣玉島町
岡山支部　幹事　津田耕水
石川縣輪島町鳳至上町ル
輪島支部　幹事　桑島文絲
石川縣小松町猫橋詰
小松支部　幹事　本田柳一路
高知市本與力町
高知支部　幹事　中澤濁水

大阪市西淀川區姫島町五二一
姫島支部　幹事　横田眠聲
大阪市外阪急沿線刀根療養所内
螢ヶ池支部　幹事　安西杏三
金澤市下堤町三八
金澤支部　幹事　比賀壽みを三
大阪市東區糸屋町二丁目九
糸屋町支部　幹事　川合舟々
和歌山縣田邊町幽靈松下
田邊支部　幹事　辻左馬
島根縣簸川郡高松村
簸川支部　幹事　尾添雷相

讀書子に告く

今のやうにあとから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

古書目錄

が出來ました。御入用の方に送呈します。

「川柳雜誌」で見たと御書き添へ　御請求を願ひます。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話　南五六二番

清酒

母親も白鶴ならと一つ受け
恩給も近く白鶴樽で据ゑ

灘津攝

嘉納合名會社釀

古本屋漁りの興味と！
古本屋そのもの、面白味を知りたい人は「古本屋」をお讀み下さい

古本屋

年五回發行
實費にて頒布
一號賣切二號少數
殘本あり

珍書や絶版書をおさがしになりたい人や古本の價値を知らうとなさる人は「古本屋」をお讀み下さい

「古本屋」發行所　荒木伊兵衛書店
大阪市西區江戸堀南通り三丁目
電話土佐堀一四六三番
振替大阪一二八五六番

大正十二年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二年九月二十五日印刷　昭和二年十月一日發行

川柳雜誌　（第四十五號）　定價金三拾錢

貝印レコード

十月新譜

涙	同	吉田一若
花	同	清正の誠忠
節	同	雪の日の村正
涙	同	末廣亭小辰丸
映	同	犬公方と水戸黄門
節	同	如眞
畫	同	酒井鶴丸
花	同	戀の木戸孝允
節	同	奴勝山
畫	同	壽々木米若
合	同	油地獄
掛	同	河内屋與兵衛
映	同	上田五萬樂
畫	同	内外管絃樂團
鈴ヶ森借金長兵衛	同	上田五萬樂
夢の久造	同	梅田五郎
内外管絃樂團	同	大塚菊二郎
細川員之	同	内外管絃樂團
狂亂星月夜	同	内外管絃樂團
高田の馬場	同	法昌山氷室旭繁
（安兵衛馳付）		
薩摩琵琶	同	吉野滑稽國刺
萬歳安來節	同	風流稽古所
關の五本松	同	河内家鶴春、芳江
船出の唄、村娘の唄	同	鈴木春枝
椿姫、夜の調べ	同	白洋園

「コルネット、ピアノ、三味線伴奏」	キ	荒川倉藏
越後獅子	シ	阿部芳越
「尺八ピアノ伴奏」	ロ	成田七五三夫
ふるさとの唄、戀の鳥	ロ	立花家梅之助
馬賊の唄朝の散歩	ホ	荒川倉藏
「ハモニカ：味線伴奏」	ン	酒井素行
船出、浦島		成田七五三夫
嬢、在郷		荒川倉藏
君ヶ代マーチ、軍艦マーチ		南方康三
管絃樂		立花家梅之助
合奏「尺八ピアノ」		神戸宮崎音樂院管絃樂團
六段、春雨		酒井素行
和洋合奏		成田七五三夫
老松、若菜摘		CS管絃樂國月社中
土蜘蛛		杵屋望
俚謡		廣澤虎若
磯節追分、米山甚句		駒澤秀晃
端唄		所車寺
御海晏		山村豐子

合資會社　内外蓄音器商會